
伝説河童の数奇な人生

瑞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伝説河童の数奇な人生

【Nコード】

N4951X

【作者名】

瑞

【あらすじ】

遙か昔

蛙の子は蛙

異端の子は異端

ここに伝説の河童

伝説河童、伝説河童になる(前書き)

原作が東方Projectの小説です

お楽しみいただけたら幸いです。

伝説河童、伝説河童になる

河童にマヨネーズをかけた胡瓜の美味しさを教えてあげたいと思っていたのが10分前。

そして現在知らない女性に抱きかかえられている。可笑しいかな、10分前までは自慢のポロアパート（笑）の一室で胡瓜を食べていたのだが。一室と言っても、もともと一部屋しかない文句なしの一部屋賃貸であった。

まてまてそれは重要じゃない。一体なぜ見知らぬ女性に抱きかかえられているのだ？それにしても美人だ。萌えるような赤い髪に…間違えた、燃える様な赤い髪に、キリツとした眉。抱きかかえられているためわからないが、この様子だとスタイルも抜群だろう。

4

「ねえあなた」

「なんだい？」

「この子の名前はもう決めたの？どうせ付けるなら縁起の良い名前にしたいわ」

「ちよつと待ってくれ。確かこの辺に…」

赤髪のお姉さんがこちらの髪を撫でながら、後ろにいた青年に語り

かける。

ていつか後ろにいたのか。影薄いな。

「うん。僕の家系のしきたりでは…えーと、この子は25代目だから…「崔」という字を入れて名前を作れば良いんだ」

「崔ねえ… 苗字は決まってるからどうしようかしら？ちなみに貴方は24代目なのでしょう？名にどの字を入れなければいけないの？」

「僕は…」

うん？25代目？苗字？名前？

これって普通赤ん坊が生まれた時の会話だよな？なんで今俺を抱きかかえながらそんな話を…

いやまで…なんで抱きかかえられてんだ俺？身長175cmだよ！この女の人どんだけ大きいの！

しかし体を見てみると手が自分のではなかった。敷いて言うならそれは赤ん坊の手だった。そう自分は赤ん坊になっていたのだ。

「じゃあ、この子の名前は決定だね」

「ええ。この子は今日から

真逢ノ栄崔

??????

しんほう の えいさい

これが新しい名前だった。

どうして自分が赤ん坊になり、新たな名前を与えられ、見知らぬ夫婦に育てられる様になったのか。

答えは分からないが、嫌な事でもない。あのままボロアパートに住み続けて将来が明るくなつたとは限らない。もしかして自分は死んだかもしれない。前世の記憶を持ったまま転生するといった話は、幾つも聞いたことがある。これまで自分がされている事の全てを驚かせる原因であつた、前世（仮）の記憶も最近では薄れつつある。だとしたら生きてみようと思う。

この河童の生を。

???

ひとまず自分の状況を知る為に、動く事の難儀な赤ん坊の体でなんとか情報を集めてみた。と言っても耳を澄ますだけだが。

いやはや自分が河童だと知った事には驚いた。胡瓜好きが原因か？

新しい名前をもらい、自分が河童だと分かった事で幾分安心していた頃、気になる事ができた。

何故孫ができたのに爺婆達が来ないのか？

孫ができたならーそれ赤飯だ、それお祝いだ、と爺婆達は喜ぶ筈なのにそれがない。相変わらず母と父だけが家にいる。

後から聞いた話だが、河童の世界の中では母と父は除け者だそうだが母は人間とのハーフ。父に至っては自分は半分河童の血が入っているが、後の半分は分からないらしい。敷いていうなれば、我が生みの親は「禁忌の子」なのだ。

河童と言えば日本の三大妖怪の一つ。時代がいつであろうと河童という種族はいわば「ブランド」なのだ。両親は雑種。除け者扱いは当然なのだ。

という事は自分は禁忌の子のクォーターか。

子供ながらに変な事を考えてしまった。

??????

月日は流れ真逢ノ栄崔こと俺はよちよち歩きができる様になってきた。言葉は未だに喋れぬが、身振り手振りで要求を伝えられる様になってきた。

友達などいない。除け者の父と母はいつも大変な仕事を回されていて、両方家にいるのも珍しい。最近はこの二人といるのがとても安心を呼んでくれる様になった。家族という奴だ。

家族っていいよね。家族って大事だよね？

何故問うかと？

ゴオオオーーーー!!!

眼前の滝のせいである。

久しぶりに家族三人で外出かと思いきや大間違いだった。家を出て、河童の集落の広場についてみれば、同じく赤ん坊を抱いている人達がちらほら。

あーだの、うーだの喋りかけてくる同年代（3歳）くらいに気を取られている合間。

眼前には滝が広がっていた。

「おつふん。これから捧命の儀式を始める。子の名を呼ばれた者の父は返事せよ」

もっさい髭を生やした河童の爺ちゃんが喋りだした。ちなみにこの爺ちゃんも母と父の事が嫌いだそうだ。甲羅は背負っているが作り物だ。河童なのにこの集落の河童達は甲羅がない。皿もない。どこにいった河童？

「真逢ノ栄崔！」

「は、はい！」

最後に自分の名前が呼ばれた。父さん。張り切りすぎよ。

「では、始め！」

何が始まるのか爺ちゃんの場合から数分が過ぎても、誰も動かない。寝るぞ俺。

すると突然一組の夫婦が自分の赤ん坊を滝から落としたり。え？どういう事？

自分の子を滝へと投げ飛ばした夫婦は必死の形相で手を前にだしている。そして何かを待っている。自分の子を殺して何をしているんだ！だが生憎言葉はどうしても紡ぎ出せないの、見守るしかできない。

暫く待つと奇妙な事が起きた。

滝の水が逆流し始めたのだ。そしてその水に乗って、滝壺へと落ち死んでしまった筈の赤ん坊が上へ上へと登って来た。

拍手喝采

集まっていた河童達が老若男女問わず騒ぎ褒める。

――捧命の儀式

滝壺へと投げ入れられ一度死に、自然と同化する意があるらしい。実際には死なない。親は自分の妖力を使い、滝を逆流させる。子の

運命は親の力が握っているのだ。儀式を終えた子には自然からの贈り物で、河童全員が持つ能力「水を操る程度の能力」を授かるらしい。

そして順番が来た。

全員が成功だったのもあり、あまり心配はしていなかった。潤む様な目を両親に向けられ、こちらも見返す。そして俺は投げられた。

??????

苦しい

苦しい

息ができない。水面へと叩きつけられたのもつかの間、息ができない。河童なのに。何故父と母は引き上げてくれない？時々水ごと持ち上がる様な感覚を感じるが、また落ちてしまう。酸素が行き渡らずともな思考ができない。母、父、そして未だ食べてない胡瓜が走馬灯になる。子供の小さな肺で最後の一息を吐き出し、死を覚悟した時にある言葉が頭に浮かびあがった。

「瑞を操る程度の能力」

意識を失いながらも浮かびあがった事に感謝していた自分は、優しい母の手と逞しい父の手に抱きかかえられ意識を失った。

伝説河童、旅に出る(前書き)

ちよつとだけ胸を借りた東方二次小説があります。

伝説河童、旅に出る

…

はい。河童村の秘書庫に忍び込んだ真逢ノ栄崔です。捧命の儀式から数年がたち、心も体も若干大人に近づいた。妖力だつて唯の熊を倒せる位にはなつた。あくまでも普通の熊ではある。年月を得て妖怪化した熊なんて自分の鼻提灯のような妖力では、まだまだ太刀打ちすらできない。能力さえ使えれば良いのだが…

————能力の使い方が分からない————

普通の河童が持つ能力「水」を操る能力。地球の表面を一番広く覆っている分子。生命の維持に必要な存在。だが俺の能力は「みずー」違いで「瑞」を操る能力である。これがさっぱり分からない。過去に22歳、現在9歳。合わせて31年の知識を総動員させても、この「瑞」という字が何を表すのか理解ができない。もう少し高校の国語の時間を集中して聞いていれば良かったのかもしれない。

これぞ後悔先に立たず

――理解ができない

――それは能力を理解できないが故に、能力を使用できない事に繋がる。

これのせいで村八分されるわ、虐められるわ、河童として認めてもらえないわ…

これぞ泣きつ面に蜂

打開策を撃つべくして忍び込んだ先が河童村の秘書庫。秘の字がついているように大切な物や危険な物が、数多く眠っているらしい。

その中でも俺が見つけたのは、漢字について述べている様な書物。その類の書物が置いてある可能性など胡麻よりも小さいだろう。だが運良く、本当に運良く適当な書物を漁れば、「瑞」に繋がる何かを発見できるのではないか？

それを求めてわざわざカビ臭い秘書庫に来たわけです。というかこれで分かなければ打つ手なしだ。助けてせんと君。

??

暫く漁っていれば出るわ出るわ。大きな水晶玉、錆びた剣、干からびた何かの腕、鈍く光る筆。価値は分からないが、容易に手にとってはいけない事はわかる。触らぬ神に何とやら。

もう暫く漁っていると、ごっつい紐で結ばれたごっつすぎる本が見

つかった。見るからに価値がありそうな本だ。

「うん？漢字が沢山書いてるけど、さっぱり分からないな。これでも漢検3級持ってたぞ。まあ、見るからに辞典のような物か」

自分がいるこの時代が何の時代かは分からないが、未だに漢字が導入されていない事を見ると、前いた時代よりもかなり前の時代だろう。この書物も達筆な字で漢字が書いてあり、後はすべて不格好な河童文字で書いてあった。その漢字が生まれた経緯や意味などが詳しく書かれている。恐らく中国で書かれたであろう本を、河童文字に訳したものだ。秘書庫にしまわれているのも納得できる代物だ。それにしてもまったく不便な時代に生まれたものだ。書いてある漢字、殆どが中国本家の漢字のようで、形も複雑だ。

「あゝお…あつた」

数分パラパラとページをめくっていると案外簡単に見つかった。複雑な漢字の中では比較的簡単な形の漢字、

「瑞」の意味は…

「瑞」……端っという字に似てるよね？てへ。

「……どおしうじつたあああああ……」

何で漢字の辞典なのに意味が書いてないんだよ！この本の著者を今すぐ出せ！

「作者の名前は…紅 糸鈴…くれないとすず？変な名前だ」

長い河童の人生…河童生の中でもしこの紅 糸鈴にであつたら、文句の三つでも言つてやろう。

一人で将来について考えていると、後ろに気配を感じた。隠れよう！と、思ったが遅かった。遅すぎるぞ栄崔！

「おい！お前！ここでなにしてる！」

「はっ！見つけた！」

「こら！逃げるな！」

「助けてせんとく〜ん」

見回りに来た大人の河童に見つかったので、トンズラ。もちろんミッションインの音楽を脳内で再生しながらだ。

???????

「母さん」

「どうしたの栄崔？悩み事？」

「何でもかんでも悩み事にしないでよ。でも合ってる。悩み事」

「お母さんに言ってみなさい。何かあったの？」

「能力の事。どうして俺は能力を使えないの？」

長い沈黙が続く。こうなるとどうしても立ち尽くす格好になるので、逃げ場がないような気分になる。

「栄崔は…普通に生まれたかった？」

「え？」

「あなただつて知つての通り私は人間とのハーフよ。お父さんも同じようなもの。だからこの集落では形見が狭いの。そしてあなたの体にもいろんな血が混じり合っている。だから能力が使えないのかもしれない」

そんなのおかしい。まるで俺を産んだ母のせいで俺が能力を使えないー不幸だと言ってるようなものじゃないか！

「違うよ母さん…俺が能力を使えないのは自分のせいだし、母さんと父さんの子に生まれた事も嫌だと思つた事は一度もない。俺はただ助言の一つでも暮ればという気持ちで聞いたんだ」

立ち尽くす母を背に部屋を出た。もし自分が母の立場だったら、自分の子に罪悪感を抱くのは同じだろう。障害を持って生まれてきた子に母親が謝ると同じように。

能力が使えない
たとえそうでもこれだけの事でこんな気持ちになるのはたまらなく
嫌だった。

?????

「尻子玉って美味しいのかな？」

気分転換の為に一人変な事を考えながら、霧深い谷底の河を歩いて
いた。嫌な事があるとよくここに来てぶらぶらする。それにしても
この谷底、河童村からはすぐ近くにあるくせに、あまり人気がない。
河童だつて霧深いのは嫌いらしい。自分も嫌いだ。

「みずみずみず」

果たして「瑞」とは何だろうか？読み方が「みず」だからやはり水
に関係あるのかもしれない。最近水に関する事を試す事が日課だ。

取り合えず河の水に浸かってみたり、滝に打たれてみたりするがな
んら起きる事はない。やはり河童だろうか水で寒さを感じる事は全
然ない。

ああ、極楽…というわけでもない。

???

「はっ！」

何時の間にか水遊びをしていたが、突如全身に電気が走ったような感覚を感じた。

妖力だ。それも膨大な。河上からは妖力に当てられて死んでしまった魚が、次々と流れてくる。

普通妖怪にとって妖力は命の源のような物であり、あればあるほど強いという。もちろん質や技術も大事だが、圧倒的な量があればそれだけで強大な力となる。しかし今感じている妖力はその比じゃ無い。自分にとって良となる物が、今は自分を恐怖で押しつぶそうとしている。

どうする？妖力の源へと行ってみるか？

運が悪ければ死ぬだろう。其れ程までに今感じてる妖力は殺人的であつた。

帰るか？

否、見たい物は見たい。一体何が起こっているのか？

俺は好奇心に負ける事にした。

来てみれば二人の人物が向き合っていた。

一人は紫を基調とした服を着た妖艶な女性。

一人は背の高い一見すると目つきの悪い青年にしか見えない男。

このどちらもが普通では無い。この殺人的な妖力の渦の中心は間違いない。あの女性だ。人は見かけによらないというが、あの女性は人間では無い。もともと人間でも無い。

――妖怪――だ。

それも今まで自分があった中でも最強の力を持っている。同じ妖怪である自分が100人いようと敵わないだろう。

それと向き合ってる青年も只者ではないのが伺える。まずあの強大な妖力に当てられていても微動だにしない。それどころか軽口を叩いているようにも見える。うん？ちよつと緊張はしているらしい。一体何が起こるのか。自分の事など忘れ、初めて見る大妖に心を奪われた。

突然女性の方の殺気と妖力が増えた。それと同時にいくつもの動きが連続で行われ、

ドツツツカアアアアン！！

大爆発が起きた。

何なんだあれは？突然変な境目の様な物が見えた瞬間、男が消え大爆発が起きた。残った女の人は傷だらけのように見えて傷などついておらず、服が少し焼けただけだった。遠くから見てたからいいものの、もし近くにいたら間違いないで死んでいた。

――強さ

これがあれば何でもできる。

抑圧される事も軽蔑される事も非難される事もない。

強くなりたい

「強くなりたい」

??????

「という事で旅に出ます」

自分の思い、河で見た事、自分の目標。これらを小一時間程かけて説明した。母と父の顔色は常に対極であった。

「栄崔、なぜそんな事を？ここでの生活が嫌なのか？それなら父さん頑張るから」

「あなた。栄崔は自分で旅に出る事を決めたのよ。それに栄崔がここで暮らして行く事で、何か良い方向に繋がるとは思えないの。ならいつそのこと自分だけの道を歩むのもいい事じゃない？」

その通りだ母よ。

そして父よ。少しは信頼しろ。

「母さん。父さん。別に永遠の別れでもないし、うん百年か一度は帰ってくるからさ」

「でも、道中危険だぞ。お前はまた妖怪の世界では唯のこわっばじやないか？」

「それなら平気よ。栄崔には守護の筆を渡したから」

守護の筆

中国の有名なお坊さんが、自分の子供の頃の毛を30年かけて探し出し作り出した、法力の宿った筆。人間でいう成人。その頃でいう15歳までなら害意を持った物を防ぐ力を持っている。生憎河童である栄崔の寿命から見れば、ちっぽけな時間だが旅に出て数年の間は身を護る事ができる。その間に修行修行修行である程度強くなければ。

「それって…秘書庫にあった物だよな？」

その通りさ父さん。

「私達の息子の安全の為よ。それぐらい許されるわ」

「そんなものか？」

「そんなものよ」

やばい。空気になってきた。ここはかつこよく決めて旅に出なければ。では

「行ってきます！」

こうして真逢ノ栄崔は旅に出た。

後日 もっさり髭のジジイが筆が無くなった事に気がつくが、その頃栄崔は遙か彼方を歩いていたのです。

伝説河童、馬車に跳ねられる

真逢ノ栄崔、旅を始めて早10年、心身少し大人に近づき、母から頂いた（母が盗んだ）守護の筆は、既に役割を終え、今では旅の相棒なり、されど未だに能力はすつからかんなり、妖力体力忍耐力、先の二つは鍛えたか、なかなかのもの、しかし後ろ一つはまだ童。

さてさて

この10年間特にこれといった出来事は無かった。ポツリポツリと各地を練り歩いただけである。こつちの世界では何処の誰よりも一番物事に詳しいと思っていた。未来から来たようなものだから。しかし違った。ケータイを使いこなす若者に、ケータイを作ってみるという様なものだ。

いくら現代の知識があつたとしても、こちの時代の土地勘、知識は0。結果的にはただほつき歩くだけになっていた。でもまあ、楽しかったから良しとする。

そして今現在俺は大きな港町に来て甘味屋にてお茶と団子を食っている。質素な作りの店は客はすつからかんだが、陽気に団子を食べられるような雰囲気醸し出している。

そして美味しい。

前世で食ってた団子なんて例100円の御手洗団子だけであったので、この赤緑白の団子は目の保養（使い所乙）になる。そして現在串の一番下にある団子をどう食べるか思考中だ。

うん。左右から二度食べよう。

要するに暇な訳だ。旅の当初は自分の能力の事について躍起になっていたが、今では時間が解決してくれると信じ、ほっとしている。行き詰まりという事だ。

たった一つの漢字の意味がわからなくて、立ち往生する事になろうとわ。

「それにしてもこの団子美味しいな」

一人呟くと

「お！兄ちゃん見る目があるねえ。それは大陸の方で作られたもんなんですぜ」

「へえ〜。大陸かあ」

店主の世間話。

「そうですね。大陸です。近頃はここも発展して、その類の船が増

えましたからなあ」

「もぐもぐ（そうかそうか）」

大陸とは考えて無かったなあ。河童村を出てからというもの、当てもなく彷徨っていたわけだし。未だに日本だって回りきってない。思いつかなかったのも無理はないか。

——大陸、少し考えてみよう。

「おっちゃん。面白い話を聞かせてくれてありがとな。お茶も美味かった！」

「ありがとさん。また来てくんさいな」

店を出れば、そういえばこの頃河童だと感ずかれる事も少なくなつたと感じた。初めの頃は、経験の少なさ故か感づかれる事も多々あったのだ。

河童のくせに人間臭くなってきたか？

独り言を言いながら暖簾をくぐると、少し先にある蕎麦屋が目についた。我ながら驚く食欲だ。食つても太らず力になるというのもまたオイシイ。

さて、今度はあの蕎麦屋にでも行ってみよう。海老あるかな海老。

大通りを半分程行った所で、後ろから大きな音がした。何事かと振り向けば二三台の馬車が勢い良く此方に走って来ているのである。これは危ないという事で軽く右に避けた瞬間、逆の方から近づいて来ていた馬車に跳ねられた。

大空高く…とは言えないもののそこそこの距離を吹っ飛ばされ、行こうとしてた蕎麦屋に顔から突っ込んでしまった。

これは手伝ってくれたとみるべきか？
阿呆な事を考えつつ、意識を失った。

??????

「あいたたた」

目を覚ませば眼前に広がるのは知らない天井：ではなく冷たい石で出来た天井だった。

目を前に向ければ鉄格子。

牢屋である。

何故馬車に引かれた自分が牢屋に入れられたか。この理由は至極簡単だ。

――妖怪だとバレた

まあそれは大事じゃない。早くここから出なければ間違いなく殺される。

しかし今頃は馬車の運転主は罰せられるどころか、妖怪退治に協力したという名目で賞金でも貰ってるのではないか？理不尽なものだ。

向かい側にも牢屋はあったが誰もいない。この妖力の残り香から推

測するに、ここは妖怪を捕まえておく為の場所だろう。

ひとえに妖怪と言つても恐らく自我の無い低級な妖怪だろう。z
ある程度力を持てば、まずこの様な所に連れて来られる訳がない。

…俺は？

一人シクシクと泣いていると

「おや？河童かい？こんな大きな町に河童がいるなんて珍しいね」
「誰だ！？」

薄暗い牢屋の何処からともなく聞こえた声に俺は身構えた。おかし
い。先までは気配など無かった筈。
しかしそれはすぐに納得へと変わる。声の持ち主は二本角の鬼だっ
た。それも幼女の。

「何故鬼がここに？鬼と言えば最強の二文字。わざと捕まらない限
り、この様な所に幽閉されるような種族じゃないだろう？」
「ほう。鬼に敬語を使わない河童は初めて見たよ。よっぽど世間知
らずか馬鹿なだけだろう…でもなかなか気にいった。その度胸に免
じて教えてやろう。聞きたいか？」

こちらの意見以前に聞かせる気満々の幼女…鬼。

「実はな酒屋で角を隠して酒を飲んでいたんだがな、そのまま酔い
つぶれてしまったわけだ。きつとその時には角も見えてしまつてい
たんだろう。結果、酔い潰れた末に、ここに運びこまれたんだろう
よ」

見た目幼女とはいえやはり鬼。永く生きている者の口調だ。しかし鬼を見るのはこれが初めてだったり。

「それはまた豪快な…では何故ここから出ない？鬼なら平手打ち一つで叩き割れるような壁じゃないか？」

――鬼

日本最強の妖怪

その理由は純粹なる怪力

その凄まじき怪力一つで日本妖怪の頂点に立っている種族である人間から見れば大きな岩でできた壁も、鬼から見れば障子を破るのごとく容易い。

「それがねえ…ここの牢屋には鬼封じの札が貼られているようですね…」

幼女鬼は苦笑する。

確かに牢屋の至る所に「鬼封」と書かれたお札が貼ってある。ここにいる鬼は人間以下の力すら出せまい。読み方は「きふう」。ここテストに出るよ。

「詰まるところ力が出せないと？」

「そついう事だ」

これは可笑しな状況だ。最強の妖怪が自然界では最弱の人によって

作られた牢屋の中で身動きとれないとわ。しかし札か…今は何時代だろうか？

「出ようとは思わないか？」

「そりゃ出たいさ。でも今の私は赤子同然の鬼。叶わんよ」

「それにしても余裕顔だな」

「永く生きていると全ての物事を遠くから眺める様になるのだよ」

「――永く生きている

この鬼は一体どれだけの時間を過ごしたのだろうか？

「此処にいるとどうなる？」

「さあねえ…実験にでも使われちゃうんじゃないかい？妖怪退治なんかの」

「それは…」

実験道具にされちゃあ困る。これは脱獄するしかないな。鬼がニヤニヤしてるのは都合上無視だ。

「ちょっと下がっていてくれないか？」

「何をする気だい？…まさか檻を壊そうっていうのかい？」

「いいや、生憎鉄は苦手だな。触るだけで力が落ちてしまう」

河童とは水の妖怪。弱点は本質が同じ水と一緒にある。渴きを与え、火、水を汚す金属。栄崔に至ってもそれは変わらず。

「ならどうする？壁でも壊すのか？」

「その通りだ」

俺の答えを自信満々と否定する鬼。やはり何処となしかこの状況を楽しんでる様な気がするのはいのせいかな？

「いやいや、例え河童が普通の妖怪よりは怪力でも、この岩の壁は無理だろう」

鬼の声を背に、構わず壁に向かって助走をつける。

渾身込めて

「それが、違うん、だな！」

ガァァーッンンンン！！！！

壁をぶん殴った。

??????

「いやあく驚いた。河童にもこんな奴がいたんだな！」

俺と鬼は牢屋から逃げ出したあと懲りずに先とは違う甘味屋に来ていた。もちろん角は隠してだ。とはいえ鬼の一方的な絡みだが。

うん？今幼女鬼が手を拭くのに使ってるのって先の「鬼封」の札じゃないか！触って平気なのかよ…騙したなジュリエット！

「で？見た所年も小童のくせに何故それ程の腕力を？」

「俺はとある事情があつて能力が使えなくてな。旅に出てからこの方、ずっと肉体訓練ばかりやってきた」

「それはそのキラキラ光ってるのと関係あるのかい？」

鬼が指差す先。先に壁を殴った握り拳の先の方が銀色の鱗で覆われていた。これこそが河童である証。俺は甲羅も皿もないが、この河童の護鱗だけはちゃんとあつた。

――河童の護鱗

皮膚の下にある訳ではなく、強い衝撃や切り傷を受けた瞬間、皮膚が硬い鱗に変化するのである。格好良く言えば自動防御システム。全身が護鱗になると格好良くなれる気がする。うん。自分の意識で変えられる訳ではなく、鱗になって暫くするとまた元に戻る。名前の通り身体を守る為にある物だが、逆転の発想で、硬い物などを殴ったり蹴ったりする事にも使える。便利な物だ。

馬車に引かれた時なぞ恐らく身体の半分がキラキラと輝いていたであろう。蕎麦屋の店主だつてたまげたに違いない。妖怪とばれない方がおかしい。

「この鱗がなければ壁を殴ったりなんてしなかったよ。っておいおい、何殴る準備してんだよ！」

「いやあ〜ちよつと試してみたくて」

流石に鬼の怪力で殴られたらただじゃすまない。鱗ごと叩き割られる事は容易に想像できる。生憎俺はまだ死にたくない。

「まあ、お礼は言つとくよ。あのままじゃあ私も危なかつたし。ありがとう」

「いや、いいんだ。妖怪仲間だろう？」

「鬼は恩は忘れない。何か困った事があつたら、鬼に頼めばいいよ。鬼神母神を助けたと言えば大抵は融通が効くから」

…

え？鬼神母神？

「き、鬼神母神？」

「そつだが」

「そ、そんな！ごめんなさいごめんなさい！まさか鬼神母神様とは知らず、ご無礼を！」

「おいおい、私はお前のその何事にも動じない性格が気に入ってるんだ。そこらにいる様な堅物な妖怪になるんじゃないよ」

いやいや、日本最強の妖怪を目の前にして普通の口調で喋れるか！

鬼神母神とは全ての鬼の母であるとされると同時に、他人の子を食べ続けたという恐ろしい存在である。でも目の前の幼女がそんな存在とは思えない。

「ま、お前が生き続ければまたいつか会うだろう。そういえばお前は能力について悩んでると言ったな？それなら紅 糸鈴という女性を訪ねればいい。達者でな若河童」

サアアアア

そう言い残すと鬼神母神は霧のような物になって消えて行ってしまった。

一人残った俺は自分の運の良さと、迂闊すぎる性格に挟まれる様に悶々としていた。

??????

さて、これからどうしよう。

幼女鬼、鬼神母神と別れた後も町をぶらぶらしていた俺は、無性にも何か行動を起こさなければと感じた。

紅 糸鈴

何処かで聞いた様な名だが、この短き河童人生の何処で聞いたのかさっぱり思い出せない。きっとこれも時が解決するだろう。これは早くも年寄り思考になってきたなと思いつつ、甘味屋に入っていく。

そこで思い出したが店主の言葉

——大陸

「決まりだな」

大陸に行ってみよう

伝説河童、脛を蹴られる

「スープをどうぞ」

「あ、ありがとうございます」

火山の様に湯気を吹きたてるスープを渡される。

「キムチをどうぞ」

真っ赤なオーラを放つキムチを渡される。

「あ、いえ、辛いものは」

「そんな事言わずに、さ、さあ！」

「ふ、ふひごべえ！」

河童こと真逢ノ栄崔。いかにしてこのような状況になったのか。

???

紅 糸鈴を捜すべく大陸に行く事を決めたはいいものの、船に乗って来てみれば一歩手前の朝鮮半島。おまけに寒い寒いと言ったらありやしない。どの位寒いかと言つと、鼻水が既に鼻の中で凍って出てこないぐらい寒い。そんな気候の中、河童の俺でも、3日も食わず飲まずで雪の上を歩き続けたらそれは倒れる。

では何故何も食えなかったのか。

朝鮮の港に着き暫くはこれといった事もなく、そこらをぶらぶらしていた。甘味屋、蕎麦屋、地域特産店：日本にあるものと概要はさほど変わらず、中身が少し違う朝鮮の町を歩き回った。

うん。朝鮮旅行もなかなか楽しくなってきたぞ、と本来の目的を忘れかけていた頃。だがしかしそれでは唯の旅河童になってしまおうと思ひ、中国目指して歩き出した。

ーー自分は妖怪。トリアスロン余裕。

わけのわからない自信と共に、地図も買わずに中国に向けて北へ北へと歩き出した。歩けばまた何処かの村にでも着くだろう。そしてその幻想は現実とはならなかった。

結果が迷子、ひどく言えば遭難である。

これはまずいと感じながら徒歩を早めた三日目に、大雪に襲われ意識は朦朧。何か、何か食う物さえあれば。

そんな時視界に入ったのが一軒の農家。正確には大きな集落の中の外れの方に位置する家だ。それはそれは仏の様に見えた。もちろん仏に見えたのは農家ではなく、畑に生えていた胡瓜。あれさえ食べれば、もう三日はもつ。疲れを忘れ走りだし、胡瓜を手につ。しかし最後の良心。これは農家の人が汗水流して作り上げた結晶。その様な物を勝手に食べてしまってもいいのだろうか？渦巻く良心と欲望。

真逢ノ栄崔ここに決めた。

俺妖怪 悪い奴 悪い事してなんぼ

こうして俺は胡瓜にかぶりついた。

…？

濃厚な苦味

野菜種族名…ゴーヤ

「な、なんじゃこりゃ…」

大雪の中で名台詞を言い放ち、真逢ノ栄崔はゴーヤ片手に倒れこんだ。

その姿は後に

「鬼に金棒」ならぬ「河童にゴーヤ」ということわざを生む発端になったのだ。

…？

そして冒頭へと戻る。

久しぶりの旅人だとかなんとか言っただけで俺を介抱してくれている。どうやら妖怪だとはばれていないようだ。ばれたらそれはどうなる事か…

こうなればあの苦い胡瓜ゴーヤを盗み食いしていた事は、墓場まで持って

行く。」

「あの、もう大丈夫ですよ。おかげさまで体調も回復しました」

「本当ですか？体はまだ冷たいですけど」

「あ、これは体質なので大丈夫です」

河童の体質というやつだ。爬虫類みたいなものだからな。

「でも今日一日無理をしてはいけませんよ。我が家特性の河童のダ

シ汁入りスープを飲んだからには、風邪なんて吹っ飛んじゃいます」

「お気遣いありがとう慈音ちゃん。ところで…今なんて言った？」

「え？吹っ飛んじゃうと…」

「いや、その前」

「河童のダシ汁入りスープと…」

「そ、そうだったな…あははは、は」

きつと何かの比喩だ。忘れよう。

俺を介護してくれているのはこの集落の女の子の一人、杏 慈音ちゃん。死ぬ寸前（主にゴーヤの件）だった俺を親身に相手してくれた。この恩は忘れない。俺が忘れるまで忘れない。

「では、私は仕事があるのでこれで。そうそう、三日位ならこの家
にいても大丈夫ですよ」

「ありがとう」

「ではゆっくりと」

逆に言えば三日程しか俺を預かる余裕がないという事だな。まあ、助けてくれた事だけでもありがたい。実を言えば体調はもう万全だ。妖怪、河童である。それが故に身体の頑丈さは人を超す。では何故倒れたか。

――精神

三日三晩飲まず食わずで歩き続け、俺の精神は磨耗しきっていた。それに追い討ちをかけたのが、あの苦い胡瓜である。妖怪は肉体は強靱だが精神は一度揺さぶられれば、恐ろしく弱い。何故なら妖怪とは、有象無象への何かしらの恐怖が元となって生まれた存在だからである。本質が肉体でなく精神である妖怪にとつて、気持ちの持ち様はとて大切、故に倒れた。補足すると神とは何かへの頼る思いが集まって生まれたものだ。当然それが消えれば神も消える。妖怪もそれは同じ。

??????

暫く休んで外に出てみれば、雪は止んでおり集落の人達が働いていた。農業主体なのか、ほとんどの人の服は土で汚れている。知ってる人がいないので自然と慈音ちゃんを目で捜す事に。

「どこだー？」

いた。背丈よりも大きな篁を幾つも持つて、よたよたと歩いていた。小さいうちから大変だなあ、と感傷に浸っていると、これまた大き

な米袋みたいなのを押し車に沢山積み重ね、慎重に運んでいる少年が目に入った。

これはフラグが前転倒立をした気がする。

何気なく散歩しているふりをして、今まさにすれ違おうとしている二人に近づく。

そして事は起きた。

慈音ちゃんと少年の肩がぶつかる。よろける二人。もちろん不安定な米袋は重力に逆らう事なく、慈音ちゃんに襲いかかるうとする。ベタすぐる。

「ぶっ！」

それを片手で支える俺。

これは決まった。

「気をつけないと怪我するぞ」

米袋を少年に返し、俺はクールに立ち去ろうとするが、これ以上前に進めない。見れば慈音ちゃんが服の裾を掴んで

「ありがとう…」

うん。来たねこれ。年齢と彼女いない歴が二本線で結べる俺にとっては革命的出来事。ゲバラ…

どういたしまして、と言葉を残し、去ろうとするが、またもや前に進む事ができなくなる。今度は何だと振り返れば、少年に服の裾を掴まれていて

「けっ！」

蹴られた。

少年に蹴られた。

一番痛い脛を蹴られた。

おい！俺のお陰でお前が加害者にならずに済んだんじゃないか！最近の若者は教育がなつとらん。

しかし…ここは歳の差を考えてにつこりと

「どうした？」

「俺の方が強いんだからな！バーカ！」

「なぬ！」

ムカッと来ました。

おそらくあの少年は慈音ちゃんに恋心を抱いてたんだな。それで俺をライバル視したのか。

若いつて素晴らしいと思う。

泣きながら畑の方へ走って行く少年。それと対比的に頬を染めている慈音ちゃん。まるで午後ドラだとか思う。

じゃあ、此処ら一帯で一番大きな家の障子の隙間から、こつちを凝視している婆ちゃんは姑役…

ハッ！

見られている。

俺の事をジッと見ている。

負けじと見返す事30秒。

手を振ってあつち行けをされる。

なら立ち去ろう。

少し慌ててもう一度あつち行けをする婆ちゃん。

これはこつちに来いの意だと理解。

何か嫌な予感を感じながらも、とりあえず婆ちゃんの所へ行ってみる事にした。

??????

招かれた家に玄関から入って行けば、俺を泊めてくれている慈音ちゃんの家よりも、小綺麗で一回り大きかった。

居間で待っていると、婆ちゃんが煎餅と茶を持って現れる。

「さてさて…何か話そうかのう栄崔君…」

「俺の名前を知っているんですか？」

「ふおおおお。お主がゴーヤを盗み食いした事もな」

あら！ばれていた！

しかもゴーヤだったのかよ！

「あれってゴーヤだったんですか…どつりで苦いと思いました…この度は盗みを働いた自分を介抱してくれた事、誠に感謝します」

様子からするにこの婆ちゃん、村で一番偉いのだろう。もし追い出せと言われていれば、俺はこの集落で骨を休める事ができなかった。

「いいんじゃない、いいんじゃない。なんとなく先立つた息子に似ている」
「う」

「そうですか…」

暫くはバリバリという煎餅を食べる音と、ずずずという茶を飲む音だけが響く。

「ところでなあ、二日後に、とあるお方がくるのじゃよ。それについて少し頼み事があるんだがのう。いいかな？」

「頼み事？どの様な？」

「ふおおおお。年寄りになると遠回しな言い方が好きになるでな。一つ試してみよう。お主が食べたゴーヤ、何かおかしな点は無かつたかのう？」

胡瓜だと思っていればおかしなところだらけだったが、ゴーヤと知

れば特に不審な点はない様に思える。

「と、特に何も無かったですけど…」

「ふむ。ちとばかしここの回転が遅いようじゃのう」

頭を指差しながらにやける婆ちゃん。

「な、なら一つぐらいヒントをくださいよ」

「そうかそうか。では一つ。ゴーヤとはどの様な所で穫れる？」

「どのようなうって…」

ゴーヤと言えばゴーヤチャンプル。沖縄だ。確かあそこは日本で一番暑い…

暑い？

「あれ？此処って物凄く寒いのに…なぜゴーヤが」

「ふおふおふお。正解じゃ。実はのう、二日後に来るお方の力のお陰なのじゃよ。そのお方の好物という事もあるがな」

寒い所で穫れる筈のない野菜を穫れるようにする力…

深緑…

間違えた。神力だ。

「神様の影響ですか…」

「その通りじゃ。そのお方がゴーヤが大好きでのう。特別にこの地

に神力を流し、ゴーヤを育てられるようにしたのじゃ」

思えば外は極寒の寒さなのに、集落はどことなく暖かった。この地を治める神がなしていた技だったのか。

「それで。頼み事とは？」

「ふおおおお。河童であるお主にその方がこの地にいる間、世話役をしてもらいたいのじゃよ」

「世話…ですか」

「世話と言ってもただそばにいていろいろと使いつ走りをするだけじゃ。どうかのう？勤めを果たせば本物の胡瓜10本で…」

「乗りましたその話！」

こうして俺はこの地を治めるといふ神様の世話役に抜擢された。ま

あ、一度位は本物の神様を見てみたかった事だし、ちょうどいい。それにしても河童だといふ事までばれていたとは…年寄り怖い。

伝説河童、相撲を取る

八坂刀売神

やさかとめのかみ

これが真逢ノ栄崔こと俺が滞在している集落の人達が崇めている…
というよりも信賴している神。

――八坂刀売神――

神道の女神で、建御名方神の妃神である。その伝承の殆どが諏訪地方にあり、一説では諏訪地方固有の神であると考えられている。

諏訪地方固有の神。つまりは日本の神様だ。何故、朝鮮半島の集落で祀られているのか。この理由がまた、いと可笑し。

何十年も昔、八坂刀売神は夫である建御名方神と喧嘩…俗に言う夫婦喧嘩をしたらしい。こうなれば家出だ家出と息を巻いたのはいいものの、日本にいては日本の神である夫の神通力によって、全てが覗き見される恐れがある。家出を覗かれるなんてそれは嫌。自分だって神なのだが夫の干渉を防ぐような力はない。
ならどうするか？

日本の神道の力が届かない所に暫く旅行にでも行けばいい。そしてら夫も戻って来てくれと泣きついてくるだろう。一人では飯も作れない夫なのだから。武神のくせに。

こうして決定したのが朝鮮半島。ここでは自分を信仰する民がいない。すなわち神力は溜まらず、使えば使う程減っていくという状態に陥る。だからこそ八坂刀売神は神力をセーブしつつ、朝鮮旅行を楽しんでいたのだ。

そして問題は起きた。

飛行機が遠くの地に行く場合、行くのに必要な燃料と帰って来るのに必要な燃料を計算する。

八坂刀売神は後者を忘れていた。

さて、そろそろ夫も飯が食えず、押入れに閉じ籠ってのの字を書きながら泣いている頃合いかな？

直感で感じた八坂刀売神は一ヶ月程いた朝鮮半島を離れる事に。

だがしかし

神力残り2割

やってしまった。

やってしまったのだ。

帰る分を忘れていたのだ。

こうなれば一考の猶予すらない。街から街への移動中だった八坂刀売神は、すぐさま帰りの歩を早めた。しかし願い叶わずなけなしの神力が限界を迎える。朝鮮で八坂刀売神を知ってる者などないに等しく。信仰する者などそれこそない。

このような異国の地で消え去るか…

八坂刀売神が走馬灯を見ている時に同じくして、消えゆく八坂刀売神を見ていたのがお婆ちゃん。巫女修行の途中だったお婆ちゃんは、八坂刀売神に何が起きているのかすぐに気がつき、八坂刀売神の巫

女になる事で八坂刀売神の一命を取り留めた。僅かながらの信仰による僅かな神力の提供である。

そして現在この集落と八坂刀売神は、有効な関係にあるという訳だ。はっきり言って八坂神のお茶目度満載の話だっ t

ゴスツ！

「あ、ごめんなさい殴らないで下さい。お願いします八坂刀売神様」
お茶目という言葉が気に入らなかったのか、軽く横腹を殴ってくる八坂様。

「ふむ。お主、栄崔と言ったな。河童じゃろう？」
「よくお分かりで」

さすがは神と言ったところか。

「だが、色々と混じっておるな。父も母もその類か？」
「ええ。母は人との、父は…分からないそうです」

「ふむ。今の時代そういう事はよくあるからのう…嫌か？」

「いえいえ。両親から貰った血、大事な私の一部です」

「今時珍しい河童だな、お主は」

「ははは…」

ここはお婆ちゃん宅。お婆ちゃん、八坂様、俺の三人で三角を描く様に雑談中だ。お婆ちゃんには今まで名前を聞いていなかったのだが、改めて聞いてみれば、知枝、という名前だそう。通称、知枝婆。

「それで？巫女よ。何故故に私を呼んだ？」

「それは八坂様…ここ最近集落の近くに不穏な匂いがいたしましてな。少しお力をお借りできないかと。私も歳故に…」

少しばかり声の調子を抑えて話す知枝婆。この分だと集落の他の人にも話してはないのだろう。俺は一応部外者という事で大丈夫なのか？

「ふむ…確かに嫌なモノがこの地を踏んでおるのう。それも二つ。厄介だ」

考え込む様な八坂神の声。俺はまるつきり分からないが一応、うん、うん、と頷いておく。

「明日にでも行ってみるとしよう。だが今日は宴会を開くが良い。ゴーヤ料理もな。その方が私も力が増すのだ」

もう初めからそれ目的で来たのでは？

と、疑いたくなる笑顔。そして此処でゴーヤか。

八坂刀売神が来た事を祝う。即ち八坂様への信仰心が上がる。よって神力が上がるといふ事だ。神とは自分で力を作れない。その分、他人の信仰によって力を作る。それ故に神力とは、この世にある力の中で一番力を持っている。一番得にくい力でもあるが。

「ところで巫女よ。使いつ走りが欲しいのだが適任はおるか？」

「はい。そこに」

知枝婆の指の先には勿論俺。はじめから決まっていたので、俺は手を上げて合図する。そんな俺に

「チエンジだ」

「へ？」

「チエンジだと言っておる」

「why？」

「河童如きが我のお供など到底務まらぬ」

おいおい。それはないだろう！

「八坂様。こやつ栄崔はなかなか面白いものを持っている故。少しばかり抜けていますが、八坂様を楽しませるのには、事欠かないでしょう」

にやけながら話す知枝婆。

「ふむ…巫女が言うならそうなのだろう。栄崔よ、面白い物とは何か？」

「いや、特には…」
「やはりチェンジだ」

いやいやそれはないだろう。何処の風俗店だ。

「実は…不思議な能力を「まあよい！宴会の準備じゃ！」

八坂神はなかなかマイペースな神様だ。本当にこの人の夫が俺には気がかりです。

「へいへい。準備すればいいんでしょう？すれば」

「なぬ？」

「すいません。八坂様。ただいま」

胡瓜の為、胡瓜の為。

こうして宴会が始まるのである。

??????

えんやえんや

大騒ぎである。

集落の真ん中にある広場でそれは行われていた。
村人は八坂神が来たのを口実にハメを外して、騒ぎあっている。だからといって俺が騒げるという訳でもない。

八坂神は広場の真ん中の、大きな神台の上で飲んでいた。言うなれば大きな卓袱台の様な物で、その上にいるのは使いつ走りの俺と巫女の知枝婆だけである。

神台の上の卓袱台の上には、これでもかと酒と料理が並べられている。大層な事だ。

俺は酒のお供をなしていた。

「でおう！その時諏訪のカエルがのう！」

「はい…はい…」

「帽子が吹っ飛んでのう！」

「は…はい」

かれこれ3時間。この間ずっと同じ様な話を聞かされていた俺の精神は逝く寸前。話に出てくる諏訪のカエルすらも恨みたくなる。心に護鱗を敷き詰めたいと野暮な事を考え始めていた。

飲み始め当初は

「八坂様、少しばかりお教えて頂きたい事が」
「神に言ってみ」

お猪口の酒をちびちびとカリスマ全開で飲んでいた八坂神に問いかける。

「「瑞」という漢字の意味がわかりますか？」
「お前は我を馬鹿にしておるのか？」
「いや、ただ無知故に私は知らなかったのだ」
「「瑞」という漢字はな…「瑞々しい」などに使うでは無いか？」
「あ、それがありましたか。でも、その他には…」
「それ以外は知らない。神であるが、漢字が全て分かる訳でもないのだよ」
「そうですか…」
「それよりも少し酒をもって来るがよい栄崔よ」
「はいはい」

じゃあ、俺の能力って何かを瑞々しくさせるのか？まあ、違っただろう。もしそれだったら果物屋でも開くか？冷蔵庫要らずで、いつ迄も瑞々しく果物を保存できる。これは儲かりそうだ…泣きたい。

この数分後から酒の回った八坂神は、やれ芸を見せろ、やれ酒を持つて来い、やれ私の裸が見たいか、の始末。
因みに河童芸として、集落の屈強な漢達と相撲をやらされ、拳句には八坂神も乱入して来て、全員ダウン。
いとおかし。

そしてまた現在

知枝婆に助けを求める視線を送れば、首を降られる始末。
いつその事自分も酒を飲み喰らって潰れてしまおうか？

その時俺は見つけた。有名な酒「鬼殺し」の横にある「神殺し」と

いう酒を。先迄は無かった筈なんだが。中身はあまりにも毒々しい薄紫色。死んでも飲みたくない色合いだ。未だに「カエルが」だの「お漏らし」だのほざいている八坂神の皿、ゴージャスなチャンプルの乗っている皿に少しばかりそれを混ぜる。罪悪感など雀の涙、虫の鼻糞。

それを知らずに食った八坂神は

「ういゝ」

バタンキューである。

これじゃあ唯の酔っ払いではないか。本当に神様なのか？

八坂神が倒れた事で幾分か軽くなった気持ちで周りを見渡せば、それは平和そのものだった。人が騒ぎ、人が泣き、人が笑う。自分が妖怪である事すら忘れる様な平和。八坂神にはこれを守ってもらいたいものだ。

生まれて始めての宴会は八坂神の酒癖と共に、栄崔の心へ好印象を植え付けて終わっていった。

???????

月が空を支配している時

八坂は目を冷ました。

2畳程の距離の先には栄崔が横たわっていた。

「少しばかりハメを外しすぎたかのう」

つつい友達のア呆話を聞かせ過ぎた。栄崔の背中には少なからず呆れが見える。

「帰ってこれたら、加護でも与えてやるうかのう」

何の接点も無かったこの河童に、自分は不思議と親近感を覚えていた。だからこそこれから行く場所が惜しい。

「「瑞」…か。今のお主には大き過ぎる物じゃ。お前が良い奴に成つてくれればそれで良いのだが」

月を見つめ

「達者でのう」

薄暗い中、八坂刀売神は、森へと一人、入って行った。夫の顔を思い出しつつ。

??????

――摩馳――稜騰

共に中国に伝説の残る邪神である。

摩馳は赤黒い小さな体に、6本の巨大な腕。小さな体には、13対の目玉がギラついている。巨大な腕の先には全てを切り裂く鉤爪がついている。人肉を好み、特に赤ん坊を好んで食していたという。

稜騰は青黒い大きな体に、これまた巨大な腕。それは鬼の様で鬼ではない。稜騰も人肉を好んで食べていたという。

この二人の邪神が一人の神と対峙しあっていた。

一人の神というのは、言わずと知れた八坂刀売神である。中国の邪神と日本の神が朝鮮の地であいまみえる。

少しばかり開けた所。

いつもなら鹿や熊などの動物が睡眠を取る場所なのだが、今はいず。栄崔が滞在していた集落の巫女、知枝婆が感じ取っていたのはこの二人の邪神の気配であった。この邪神達、中国であまりにも悪事を働いた為に、とある人物によって痛手を負わされたのだった。それ

に乗じた人間たちは、喰われた者達の仇討ちの為に、中国全土を追い回した。
結局稜騰と摩馳は朝鮮の地へと逃げのび、この集落の近くに辿り着いたのである。

「それで？素直に立ち去る気は無いのかい？」

答えは既に知っている。

「人肉を喰らい、力をつける為に来たんだ…わかるか島国の神」

「生憎此処は私を信仰してくれている。この半島の一介の集落此処を護るのが、島国の神の役目なのだよ」

「ほざけ雌豚が！」

互いに互いが睨み合う。

常識的に考えて分が悪いが、二人の邪神は大分弱っているのだからかもしれない。

ザッ！

先に動いたのは気性の荒い摩馳であった。
その6本の腕に邪力を纏わせ、八坂神を引き裂こうとする。

「弱い」

嘲る様な八坂神の声。

まるで滑る様に、高速で、土の中から御柱が突き出す。それは突進する摩馳を上へと弾き飛ばす。同時に上から降って来た、より巨大な御柱の底に摩馳を張り付かせた。地面とのサンドイッチ。これは遊びではない。消し合いなのだ。

ズドォーンン！（グチャリ）

不快で耳障りで吐き気をもよおす声と共に、摩馳は潰れた。御柱が地面と抱擁をさせたのだ。

邪神ともあろうものが。

「弱いな。いい事だが、あまりにも弱過ぎやしないか？稜騰よ」

戦う相手が弱いという事は自分にとって有利な事この他ならない。
だからこそ八坂神は危惧した。腐っても邪神の筈なのだ。

「当たり前だ」

此処でようやく稜騰が口を開く。思えば摩馳の攻撃にも加勢せず、摩馳が死んでも顔色一つ変わらない。

「こいつは俺達を崇拜する邪神教の信者がいないのにも関わらず、此処に来るまでに暴れ通したからな。邪力なんて無いに等しかった。まあ、その為にこの集落を襲う事にしたのだがな。それに誰が好き好んであんな脳筋を助ける？」

稜騰は嬉しくも悲しくもないといった様子で、摩馳の死体へと近づく。

「死ねば喰う。それが俺のやり方だ」

グチャ

グチャ

稜騰は八坂神の目の前で、既に原型を留めていない摩馳を喰らう。一口喰うごとに、稜騰の邪力が上がっていく。それでも八坂様は動かなかった、否、動けなかつた。仲間を喰べる神を、直視できるよくな肝は八坂神には無かつたのだ。

それは突然

青黒い巨体には見合わない早さで、突然稜騰は八坂神に突進する。一瞬のうちに八坂神は反応し、打撃を防ぐ為に胸の前で両腕を組む。

「消し合い、だろ？」

ズブリ

邪力を纏わせていた稜騰の手刀は、安安と八坂神の下腹を突き抜く。

「ガハツ！お、お前！」

「ん？お約束で守っている所を殴って欲しかったか？いいか？お前は摩馳を殺した。ならば自分が死ぬ覚悟もしておかないとなあ」

ズブリと八坂神の腹から手を引き抜く稜騰。

「ふん、戯言を…」

そういう間にも八坂神の体からは血が流れ出す。神力で補おうにも、普段よりも少な過ぎるその量では、至難の技であった。

「消えるがよい島国の神よ」

シュン

稜騰の手刀が動いた。

???????

「おい」

「うん」

「おい！」

「何だよジジイ！！」

俺は二日酔いの頭を抑えつつ呼びかけに応える。まだ太陽は出ておらず、辺りは暗い。広場には死屍累々。全員酒を飲んで眠っている。あれ？慈恩ちゃんまで？

「ふむ。神にその様な口を聞くとは大層な河童だ」

「え？八坂様：あれ？男じゃん」

「ほう、朝鮮の地で我を知っておるか：では妻の八坂刀売神を知っておるか？」

知ってるって何も俺の隣で寝てる筈。ゴーヤチャンプルに神殺しの酒を入れたのは俺なのだから。

「俺の隣に…いない」

「外の地の宴会に呼ばれたとかで家を出て行ったのだが。ちよいと心配になってのう」

「八坂…刀売神様の…」

「そうだ。夫の建御名方神である」

これはこれは。大層な武神が現れた。かつての日本で、最強の神に立ち向かったと言われる、建御名方神だ。強靱な武器を身につけているが、はつきり言って顔も体も草食系男子だ。実際に少しばかり武器が大き過ぎるような気がする。武器を着ているのではなく、着られていると言ったところか？
口には出さない出してはいけない。

「八坂様は先まで此処で寝ていたのですが。何方かへ行かれたよう
です」

「うむ。すぐに帰ると約束したのに。守谷と一緒に飲む約束じゃ
つたのに」

「さいですか…」

これが終わってまだ飲むつもりだったのかあの八坂神は…もはや尊
敬に値する。

ズドォーンン！

「な、何の音？」

近くの森で大きな物音がする。俺と建御名方神の間に緊張が走る。

「河童よ。ついて参れ」

無言で走り出す建御名方神。ついて行くしかないのは普通だろうか。

???

ついてみれば圧巻の光景。

地面に深々と御柱が突き刺さっていた。御柱の突き刺さっている地面は、何故か血が飛び散っていた。そしてそこにいるのは八坂神と鬼の様な何か。対峙している。

流石の建御名方神もこの状況に、ポカーンとするしかないようで、俺と同様に口を開けて突っ立っている。

その時それを変える事が起きた。八坂神と対峙していた鬼が、一瞬消え、次の瞬間には八坂神の腹を手刀で突き刺していた。

「「あ……」」

男性特有の。例えば彼女が他の男と歩いている時に出してしまう情けない声。例えば自慰を母親に見られた時に出してしまう情けない

声。

目の前の光景にそんな声を俺と建御名方神は同じく発してしまった。

伝説河童、酒を飲む

「苦しゅうない苦しゅうない！」

「ちよ、頭に酒をかけるのやめて下さい……」

「たく、河童のくせして皿が無いとはのう！ははは！」

「何が面白いんですか八坂様……」

「まあ、神奈子。その辺に」

真逢ノ栄崔こと俺は八坂神、建御名方神と共に、集落の長者である知枝婆の所で酒を飲んでいる。知枝婆は後片付けとか何やら言って森に入って行ったが、八坂神が神妙かつ余裕な顔をしていたあたり大丈夫なのだろう。こういうのは気にしたら負け、なのだ。

飲むと言っても、実際には酒のお供をさせられている、というのが正しい。寝て起きて気がついたらここにいたというのも、自分から八坂神達と飲みたいと言ったわけではない。何が言いたいかというと、八坂神のダル絡みが非常にウザいという事だ。

あれ？そういえば八坂神は異国から来た邪神によって命を……

と、思った人もいるかもしれない。実際に俺もなかなか混乱していた。事の顛末はおいおい知れるとして、いったい何故建御名方神が八坂神を……

「神奈子」

と呼んでいるのか。

理由は幼稚とも女性らしいとも取れる。建御名方神は妻である八坂刀売神を

「刀売神」

と、初めは呼んでいた。

あまり女らしく無い。女心故かこう呼ばれる事を嫌った八坂神は、三日三晩考えた挙句に

「神奈子」

という夫婦間専用の名前を作り出した。神々にとっては名前とは重要他ならない為、こう呼ぶのは夫である建御名方神と親しき仲の守矢の神だけだそうだ。名前が忘れ去られる事は、神々にとって存在を忘れ去られる事と等しく、消える事と等しい。それ故に神奈子と呼んでいいのはごく少数。

こんな事を考えていれば、八坂神が口を開いた。

「それで栄崔よ。すまんかったのう面倒事に巻き込んでしもつて」

「いえいえ。誠にお言葉その通りです」

「なぬ！」

「まあまあ神奈子。正直ではないか」

俺は正直に言ったただけです八坂様。考えてもみれば村に滞在しただ

けで、神と神の戦いで気を揉む事になるとは、面倒な事である。ど
のみち俺には被害なんて何一つ無かったが、八坂神が腹を突き刺さ
れた時なんて、本当にいろいろと辛かった。口からいろいろと出て
くるかと思っただ。

「こつちに来るが良い河童！」

ちよつと！正直に言えと言ったのは八坂様でしょうが！なんで「河
童殺し」なんつうお酒持って近づいて来てるの！建御名方神も目を
逸らすなよね。

「神を敬わぬ河童はこうなるのだよ栄崔！」

「ちよ！名前からして河童だけが酔う酒の類じゃないですか！」

「お主が我のゴーヤチャンプルに同じ物をいれたのを知っているぞ。
我は」

「ど、何処で！いや、誰に！」

「神の勘じゃよ、勘。そつだよのつお前さん？」

「あ、うん…勘なんだよ…栄崔君」

こうして俺は酒による夢の世界へと旅立つ。一瞬変な境目が見えた
のは気のせいかな？

???????

「寝入ったか……。今考えればよくお前さんの怒気に当てられて死ななかつたものだ。そんじゃそこの者では、人も妖怪も逝ってしま
うのにのう」

「やはり神奈子の言っていた能力の影響か？」

「瑞、とな。厄介な力を持って生まれた河童じゃな」

二人の神が言う「瑞」という理を操る力。栄崔にとっては知るのも

操るのも早過ぎるのを、二人の神は知っていた。それ故に誤魔化し、羽生らかし、栄崔が己の力を操る事のできる者になるまで見守るつもりであった。幸いにも、栄崔は真つ当な人間：妖怪になれるぐらゐの精神は持つている。いつそれがぶれるのか、それだけが二神は心配であった。

「加護でも与えようか？」

「そうさなあ…それと悪い虫が付かないように、女との縁は大きくなるまで無しにしとこう」

「それは男性にとつては生き地獄なんだが…」

「だいたい賢明で聡明な人は、悪女に騙されて人生を狂わす。栄崔とて例外ではないのだろうか？」

「まあ、程々にな神奈子」

「わかつておる」

その時、知枝婆が自らの家に帰って来る音が聞こえる。たわいのない…栄崔にとつてはたわいのなくない話をしていた二人の神は、巫女が来るのを待つ。

「ただいま戻りました。八坂刀売神様、建御名方神様」

「よくぞ戻った妻の巫女よ」

「ご苦労であったな巫女よ。奴等の骸はどうした？よもや埋めただ

けではなかるう?」

自分の巫女がそんな無用心な事など、する事は無いのを知っている八坂神であつたが、ここは一先ず聞いておく。建御名方神にとつては自分の巫女では無いのだが、一応神を祀る人間として敬意を払う。彼らがいなければ、自分達は存在する事すら難しいのだから。

「浄化の札を貼り付け、浄化の炎で燃やしました故：灰は秘技により抹消させたので大丈夫かと」

「一先ずはそれで安心だな神奈子?」

「しかしのう：また奴等の様なのは生まれてくるのであらう：天地、神と邪神。光が無ければ闇もない」

「そう言われると元も子もないんだが：危険は去つたからいいじゃないか?」

「うむ。巫女よ、ご苦労であつたな」

「嬉きお言葉です八坂様」

いやはや、もし巫女が二人の邪神に気づくのが遅かつたらどうなつていたか：そう考えれば怪我はしたが、なかなかいい結果だと思つ八坂神であつた。

「それにしても八坂様。あの時は何かあつたのですか? 栄崔は起きた初めは八坂様が死んでしまつたと、泣き通していましたが」

「ほう：栄崔が泣いていたのか：ふふふ」

「神奈子、話がずれてるぞい」

「八坂様、栄崔の能力についてどうお考えで?」

「おい、巫女も話がずれてるぞい」

「ふむ…あれは普通ならば神級の者に似つかわしい能力なのだがな…」

考え込む八坂神。そこに口を挟んだのは建御名方神。実の所、女性二人に無視をされたのが悲しかっただけである。

「あの河童の父親の血。何か関係がありそうだなあ。いずれにせよ、我々には解らないという事だがな」

「そうか」

「どちらにしても、栄雀君はこれからも厄介事に巻き込まれていくであろう。それならば今は見守る他ない」

「うむ。さてさて知枝婆よ、次はあの時何があったかじゃのう！」

栄雀についての座談も終わり、本来の話話を話そうとする八坂神。

「わかっておると思うが、自分の良い様に話を作るなよ神奈子」

「わ、わかっておる」

既に傷の塞がった腹を撫でながら、八坂神は建御名方神の説明も交え、知枝婆に先に問われたその時の事を語りだす。実の所、夫がいなければ自分の失態をちよいとばかり良い風に直していたかもしれない、そんな八坂神であった。

???????

稜騰がズブリと八坂神の腹からその手を抜いた時。遠くから見えた栄崔と建御名方神は、これまた肝を抜かれた様な気持ちになった。どちらも動けず、どちらも瞑れず。

八坂神からすれば自分の命が終わる時を覚悟していただろう。信者達、近頃会った河童、夫の顔が走馬灯の様に過つたはず。そして稜騰がトドメとばかりに腕を振り下ろす。そこで栄崔の記憶は途切れており、ここから先を知るのは今現在では二神のみ。

振り下ろされる手を止めた。否、吹き飛ばしたのは一本の矢。神力を纏ったそれを打ち放つたのは誰でもない日本の軍神、建御名方神である。初めに栄崔に会った時の細さは消え、そこには最強の二文字がピタリと当てはまる男が弓を構えていた。

その覇気に当てられた栄崔は敢え無く失神。そこから先は捕食者と被捕食者の乱舞。建御名方神が弓を放つ度に、稜騰の体は吹き飛び、

命が消えていく。

建御名方神は怒気に埋もれる頭の中でどこか自分に命乞いをする声を聞いたが、それは呆気なく消え去り、妻を傷つけた者を塵にした。これが建御名方神であり、八坂刀売神の夫である。

時間が流れ、風の流れが元に戻った頃、気がつけば妻を治す巫女と、塵となった邪神だけがその場には残っていた。

??????

朝起きればそこは見知らぬ天井…否、近頃は見慣れた知枝婆の家の天井。

「そついえば俺は…酒か」

昨日は八坂神に酒を飲まされダウンしたんだったかな。頭がズキズキと痛むが、良い匂いが台所の方からするので行ってみれば、知枝婆が朝飯を作っていた。

「知枝婆、早起きですね。八坂神達は何処に？」

「帰ったぞ。昨日の夜に私の家の酒をたらふく飲んだあとにだがな」

「本当ですか！何故何も言ってくれずに…何か伝言とかは…」

「特にないぞ」

「さいですか…」

二人の神。特に八坂神とは仲良くなれたと思っていたんだが。人生…河童生とはいかなるものか。

「まあ、これを渡してくれと言われたのだがのう。ほれ」

「うお！何故故に投げますか！」

「テンプレートじゃよテンプレート」

見ればお守り。一見すれば変哲一つもないお守りだが、御柱と弓矢が交差してる絵柄からして、これは八坂刀売神と建御名方神が神力を込めて作った物だとわかる。こういうのは小学生以来だなと思いつつ、懐にしまつ。

さて、これからどうするか…

「北へ行くのだろうか？」

「知枝婆…何故故にそれを知っていますか？」

「婆の勘じゃよ、勘」

「勘ですか…取り敢えず正午にはここを発とうと思います。今まで

お世話になりました」

「ええんじゃええんじゃ。朝飯ができるまで他の人に挨拶でもしてこいな。最後の最後で河童だとばれぬようにの」

??

挨拶と言つても、この村で世話になったのは知枝婆と慈恩ちゃんだけなんだが。まあ、適当に挨拶しておこう。

暫く歩けば、よく畑仕事を手伝っていたおじさんに出会った。麦わら帽子に白いシャツのようなもの。手押し車を引いている。いつもと変わらぬ。

「よう！栄崔君！今日も畑を手伝ってくれるんかい？」

「いえ。旅出の挨拶に来ました」

「そうか…もう行くんかい。近頃の若者はよく動くもんだな！」

「若者…ですからね」

自分はあなたより年上なんです、という言葉を読み込み適当に相槌を打つ。

「そうさなあ栄崔君。知枝さんからこれを渡してくれと言われていてな。ほらよ」

そう言つとおじさんは農具を積んでいた車から、麻袋に包まれた物を渡される。

「なんです？これは？」

「ああ、まだ開けないでくれ。お前さんが無償に腹が減つた時に開けるとさ」

「さいですか…」

予知能力のようなものを持つてる知枝婆の事だ。素直に従うのが良策だろう。

「ありがとうございます。確かに受け取りました」

「おう！達者でな！」

「では」

おじさんは手を振ればトコトコと車をおして歩いて行く。自分もいつかああやって自分以外の者の為に働く事になるのだろうか？だとしてもそれはずっと先だろうが。

別れの挨拶？を終えた俺は、自分が特に哀しんで無い事に気がつく。これが妖怪特有の長い生がそうさせているのか、別れというのがあまり怖く、寂しくない。

またもや暫く歩けば、今度は慈恩ちゃんの家影から出てくるのが見えた。大分遠い所だが妖怪故の視力ではつきりと見える。慈恩ちゃんからはこちらは見えてないようだがな。

大きな声で声をかけようとすれば、慈恩ちゃんの後ろから、先に脛を蹴られた少年が一緒に現れる。

――恋

二人のウキウキしてる表情を見る限り、幼いながらも小さな恋をしているのである。妖怪の俺が立ち入る時ではない。俺はなんとなくの哀愁を感じながら知枝婆の所へ戻る。この間10分程度。短い挨拶であった。

??????

「行ったのう……」

「行ったな……」

「行きました故……」

栄崔が村を出るのを見守る影が三つ。

――八坂刀売神。 建御名方神。 知枝婆。

「それにしてもあの隙間妖怪にまで目を付けられるとは……」

「栄崔が持つ能力は強大だからな。生きれば生きる程強くなる妖怪

でもあるからな」

「どうなりますかな？あやつの未来はどうにも見えませぬ」

「どちらに転ぶかのう…」

二人の神と一人の人間は顔を見合わせ。

強大な力を持つ者とは、この世の良い物悪い物全てを引き寄せる。
それがただただ心配なのである。

「案ずるより産むが易し！守谷の紙も待っておる。飲みに行こうかな！」

「神奈子…使い所が違うん」八坂様、もう酒はありませぬが」

「…」

無視された男の心情とは裏腹に、冬の寒さはゆっくりと消えていくのだった。

伝説河童、山を登る

真逢ノ栄崔中国目指し北を目指し歩き続ける一年間、山越え谷越え町を行く、気がつけば丁度半島の付け根の辺り、この山越えれば中国だ、意気込み喝入れ登りゆく、色々出てくる難登山。

俺は八坂神達と会った村を出発した後、

――北へ向かう

という事以外は意識をせず歩き続けた。相変わらず能力は蓄すら見せず、体力ばかり無駄に伸びて行く。

今歩いている所は推測するに朝鮮半島の付け根辺り。正確な境目などわからないが、確実に中国に近づいている。ところで最近は何故自分が中国を目指しているのかすら忘れる時がある。ポケの進行が早いのか。

にしても山が多い。

村を出てから一体幾つの山を登降した事か。妖怪故疲れる事は稀だが、山を越えるよりは、町で遊戯を楽しむ方がいい。と言うのは世の常、俺の常。

――岩、倒大木

これらが障害物となって俺の歩を遮る。

生え、生き、死に、腐り、消える。人の干渉の無い山とは、全て物が、誕生から消滅まで途轍もない時を必要とする。要するに歩きにくいのだ面倒臭いのだ。しかしそれが故に小動物や弱小妖怪にとつては絶好の隠れ場所でもある。幾つかの妖気を感じるが気にする程でもない。

なんと言おうかこの森には妖怪というよりは、妖精が多い様に感じるな。

憶測に過ぎ無いが

「ト ロ」や「ナウシカに出てくるダンゴムシ」や「顔 シ」

なんかも見たき気もする。

ごめんなさい。ジブリです。はい。

顔ナシなんて遠くの木影からじーっとこっちを見つめてくるもんだから、石をぶん投げたら、スーッと消えてしまった。いや、怖かった。

話が逸れた。

兎に角この山は普通の山とは少し違う。だからと言ってこの山を迂回するわけでもない。横に長く連なる山なので迂回が出来ないと言
うのが事実である。登る以外道が無いのである。オンリークライム
だ。

自分のこれ迄の旅行記をブツブツと呟いていれば、暫くして、木々
もなく少し開けた所に綺麗且つそこそこ大きな泉を見つける。丁度
喉も渴いていた事だ。有難くいたどころ。

水面を覗き込めば、清く澄んでる水。魚や水草がゆったりとつごめ
いていた。

「ぷはー！美味しい」

体に染み渡る。もしこれが炭酸飲料だったら泣ける、とか阿呆な事。暫くの間、卵が先か鶏が先かについて考えつつ、休憩をしていれば、丁度答えが出かかっているその時に

――殺気

本能的に身を引くが、遅かったようだ。俺は何か強靱なる力によって、強引に水へと引きずり込まれた。

???????

先程までどうやって妖力を隠していたのか。周りの魚は消え、案外に深かった泉の底へ引きずり込まれる。その代わりに出て来たのが俺を水へと引き込んだ張本人。

水の妖怪の俺に水の中で戦いを挑もうなど笑止番宣！森羅万象！

一度こんな言うてみたかったんだ俺。しかしその自信は、敵を見る為に振り返って直ぐに消えた。

――水虎

中国や日本の妖怪である。よく河童と混同されるが、実質河童よりも凶悪な妖怪だ。文献によれば四十八の河童の親分ともされ、水辺で遊んでる子供などを引きずり込み、食べてしまうという。容姿は皆さんの想像する河童をより凶悪にすれば、それだけでかなり正解である。唯の人間が水虎を退治するには、水虎が喰らった人間の骸を小屋の中に入れ厳重に戸締りし、腐らせる事によって水虎は退治できるそう。一緒に腐ってしまうという。

自分よりも高位の存在。妖怪とは人の恐れより生まれた故、強さも凶悪さも全て其れに左右される。例えばだ、

龍は神聖と考えるから龍は神聖として、猫又は尻尾が二つに別れている、と考えるから猫又は尻尾が別れているとして、暗闇には何かがいると考えるから暗闇には妖怪がいる。

水虎は河童の親分と恐れている時点で、自分は水虎よりも下位の存在なのだ。一応は抵抗するが、まるで歯が立たない。

ゆっくりと口を開ける水虎。河童故に水の中でも視界は聡明な為、余計に隅々まで見えてしまう。鋭い牙に紫色の舌。嫌だな。

妖怪の世界は弱肉強食だから、自分だけが死の存在から逃れられるとは思っていなかったが、ここ迄早く来るとは。

死を覚悟した時程時間はゆっくりと流れる。接近する巨大な口も、上から煌き落ちてくる剣も、それは蝸牛の歩く速さと等しかった。

???????

「俺、呂 洞賓！宜しくな！」

「あ、俺は栄崔。真逢ノ栄崔だ」

ずぶ濡れの状態で青年と向き合っている。同じく青年もずぶ濡れである。背は俺より高く、その目には強く澄んだ光が灯っている。背中には剣を背負い、外見は俗に言う孫悟空の様な格好。雰囲気は…色々と普通離れしている、と言えば良いか。

「先は助けられてありがとうございます」

「いや、同じ人として当然の事だろう？ところでお前はなんでこんな所にいるんだ？危ないのに。師匠の弟子になりに来たのか？それならやめとけ。師匠は弟子は一人しか取らないからな！それで俺がその1人弟子な！」

よく喋る青年である。

「いいえ。ただ山を超えただけです。お助けありがとうございます。では」

この青年、俺が水に引きずり込まれるのを見て、咄嗟に自慢の剣で水虎を切ったそうだ。

水の中で水虎を仕留め、俺を助けた辺り普通の人間ではない。修行と言っていたから仙人や陰陽師の駆け出しかもしれない。だとすればこの山に妖怪が少ない事も頷ける。何方にしても関わりたく無い為、立ち去る事にする。

「そんな事言わずに泊まっていけよ！毎日師匠と二人きりじゃつまら無いんだ！」

「で、でも俺は山を…」

「もう暗くなるから危ないぜ。先の水虎よりも厄介なのがこの山には沢山いるんだ。特に夜はな。だから泊まっていけよ！な！」

「しかし…」

面倒事には首を、否、手すらも突っ込みたく無いのだが…確かに暗くなって来たし、先の恐怖も残っている。此処はお言葉に甘えとしようか。しかしその、師匠とやらに妖怪とばれなければいいが。

「わかりました。泊まらせて頂きます」

「おう！宜しくな栄崔！」

「はい。呂…さん」

「俺の事は兄貴でいいぜ！」

「わかりました…呂兄貴」

「にしし。呂兄貴…俺が兄貴」

いつか俺の方が年上なのを教えてやろうと思っ。

???????

呂 洞賓の師匠は鍾離権と言った。なけなしの知識を集めてみれば、この二人、仙人コンビ、半端ない。中国の伝説の八仙の内の二人なのだ。これは妖怪とばれたら

「てーへんだルパン！」

とか言ってみる。しかし鍾離権は物静か、というよりも何も喋らな
いたちらしく、山の天辺にある質素な小屋で初対面を果たした時も、
その古老だが大柄な体格からは、想像でき無い程の優しい目で俺を
見つめ、小屋の中に入って行ってしまった。その小屋の中には質素
な机と椅子しか無いのに落胆するのは後の話。

呂 洞賓は師匠の行動を信頼の合図ととっいたらしく、笑顔を向けて
くる。嫌な奴ではない。

?????

呂 洞賓が

「仲良くなるには飯からだ！」

と豪語する故に、今は三人で夕の食を囲んでいる。男三人と言っ
ても悲しいが、もっと悲しいのがその内容だ。

木の実数粒。

仙人はその殆どを自然からの気で賄うと言っるのは本当だったのか…

「ところで栄崔。お前幾つだ？俺は四十三だ！仙人だしな！」

「あ、ええと、俺は17です」

咄嗟の嘘

「そうか！やっぱり俺の方が年上だったか！ははは！」

「ははは…」

何が可笑しいやら笑い出す呂 洞賓。つられて笑ってみるが、俺の視線はずっと鍾離権に向けられている。勘からするにこの男、俺が妖怪もしくは人外だというのに気がついている。しかし何も反応せず。まるで知枝婆のようだ。年寄りとはそのようなものか。

「五仙！出ておいで！晩飯の時間だ！」

一人考え事をしていれば、突然呂洞賓が声を上げる。すると小屋の窓や隙間から

ー ー ー
ネズミ キツネ イタチ ヘビ ハリネズミ

がもろもろ姿を表す。五匹は順序良く並び、先から俺たちが囓って

いた木の実を一つずつもらっ。

「呂兄貴。それは…」

「おう！こいつらは五仙つて言うんだ。灰仙がねずみ、胡仙がきつね、黄仙がイタチ、白仙がハリネズミ、柳仙がへび。人呼んで中国の大五仙！」

「は、はあ…その、飼いだのようなものでしょうか？」

その言葉を発した途端、突然へび、柳仙が尻尾で俺の脛を引っ叩いた。

「痛！なにするんだ！」

「ははは。こいつらは仙人の相棒なんだぜ！それは怒るぜ！」

――五仙

中国の仙人が扱う霊獣である。仙人に付き従い、手伝いをする役割を持つ。霊力を持ち、そこいらの動物なんかよりはよっぽど強い。寿命は1000年程で、破格である。しかし仙人から見れば短いもので、熟練した仙人になれば別れが辛いので、従えて無い事も多い。

「あのく彼らも仙術を？」

「勿論だ！見たいか？」

「是非にでも見てみたいです」
「よっしゃー！」

五匹は自分が自分がとでも言う様に呂洞賓へと尻尾を振る。呂洞賓が選んだのは柳仙、へびであった。喜びを尻尾を振ることによって表した柳仙は

シュン

狸の様に葉っぱも使わず、忍者の様に煙も使わず、瞬きする瞬間のうちに背が高く切れ目の青年へと変身していた。

「これは凄い……」
「だろ？俺の五仙は凄いなだ！」

人の姿で握手を求めてきた柳仙は、それを終えたとまた元の蛇の姿へ戻る。妖獣でもないのによくやる蛇である。この間鍾離権は一言も喋らず。椅子に腰掛けて木の実を齧っているだけであった。全く呂洞賓と鍾離権を足して二で割れば、常識ある人が生まれるのではないか？

兎も角、俺、栄雀はテンションの高い仙人の卵と、無口の仙人の家に滞在する事になったのだ。

???????

ガッ~~~~!

隣では呂洞賓が鼾をかいて眠りこけている。仙人らしくない仙人第一位だなこれ。食事も質素とくれば寝床も質素。床に藁を敷いているだけである。仙人とは如何なるものか。

そう言えば鍾離権がいない。いずれかの時に消えてしまった。不本意ながらもああいうのが仙人の鏡ではないだろうか？欲を持たず、目的を持たず、只々世を彷徨う。

鼾のせいで寝れないでいると、白仙、ハリネズミがちよこちよこと歩いて来た。話し相手にでもなってくれるのだろうか？

「どづした？」

「（いや、その、お腹が空きました故…）」

「お前喋れるのか!」

「（いえ。私の感情を念力によって流し込んでいるだけです）」

「お前凄いな…それよりかさ、五仙って聞いた時から、一つ聞いたかつたんだけどさ…」

「（なんでしようか?）」

「ネズミとハリネズミって被ってない? キャラ的に」

「（…お腹が空きました故…）」

ちくしょうスルーされたか。まあ、俺も腹が減っているから外にでて、木の実でも取りに行こうと思う。

「木の実あさりに行くけど来るか?」

「（はい。ただ、夜は危険な為に、私から離れないでくださいね）」

「おう」

?????

外に出て暫く探索する事十分程度。白仙が案内してくれた所にはあの時の木の実が沢山実っており、俺達は月を見ながらぽりぽりと嚙っていた。月は青く輝き、世界を濃い藍色に染めあげていた。心なしか木の実が美味い。

「白仙、仙人って何なんだ?」

「（はい?）」

首を傾げるハリネズミ、白仙。

「いや、何で人間なのに人外の力を持つている？」

「（ああ、それですか。絶え間ない修行のお陰ですよ）」

ハリネズミの表情は解らないが、尊敬の意で話していると取れる。そんな話し方である。

「何故修行をする？」

「（生きる為です）」

「生きる為？」

「（はい。仙人とは死ぬべき命を、俗世の欲を捨てる事によって、無理矢理に伸ばしてる故。輪廻に戻す為に死神が命を狩りにやってくるのですよ）」

「それは大層な…」

確かに輪廻を外れている。本来人間は三百も四百も生きたりしない。

「欲を無くすとはどういう事か？」

「（それは私には難しいです。俗世の欲を無くすのはわかります。しかし生の欲とは…）」

暫くの静寂がハリネズミと河童を包む。そして白仙は徐に語り出した。

「（生きる欲を無くせば仙人になり永く生きる意味が無い…しかしあり過ぎれば仙人としての力を失う。私にはわかりませぬ）」

「そうか…」

「（取り敢えず仙人は俗世の欲から捨てるのですよ。俗世の欲を捨てれば捨てる程、自然の気も取り込み易くなる。その為にこの様な山奥に住むのです）」

月は相変わらず蒼く光り輝いている。仙境だからなのか全てが有りのままの雰囲気を受ける。木も空も草も、ここにいる仙人も。

「俺には呂洞賓が俗世の欲を持ってないようには見えないんだが？」

「（確かにそう見えますが…欲があれば40も生きてあの容姿はあり得ませぬ）」

「そうか…でも奴は本当に仙人には見えないのだがな…。ほら、鍾離権。あれを仙人と言うのでは？」

「（ああ見えて呂様は鍾離権よりも生への欲がありません。その他の欲も無いに等しいです）」

同じく表情は読めないが、悲しみの籠った声である。

「（過去に色々ありました。死のうとしたのを鍾離権に救われたのです。あの目の輝きですら偽りなのかもしれません）」

「…難しいな」

「（難しいです）」

暫く無言で木の実を齧り続ける。仙人とは如何なるものか。普通が

一番ではないのか？

??

その時俺は本日二度目の殺気を感じた。

その殺気は俺へではなく、白仙へのもの。

瞬く瞬間、俺は白仙を庇う様に飛ぶ。そして俺の背中には鋭い爪が振り下ろされた。

爪を振り下ろした張本人は、目的を達成出来ずに舌打ちをする。一方で、それを庇った者の死を確信した。しかし目的は庇った者ではなく、食えば大いなる力となる仙の字の付く生き物の肉であった。

――予想は変わる。

月の明かりに照らされ、銀色に光る鱗。それが攻撃を受け止めていた。それは割れ、剥がれ、血を流していたが、自分の攻撃を受け止めるには十分な硬さがあった。そして攻撃された者からの殺気。生

あつての力である。生きる為に逃げ出そうとするが、それは胸を貫かれる事で、永遠に叶う事は無かった。

白仙を庇う為に飛んだ瞬間、鋭い痛みが背中を襲う。だが護鱗のお陰で、表面が傷を負っただけ。攻撃を仕掛けて来た物の外見は、熊の様な生き物をおぞましくさせただけであつた。

要するに――低級妖怪だ。

殺気を放ちながら、逃げる背中に拳を放つ。そう言えば初めて生ある物を殺すな、とさえつつ、自らの手が胸を貫く感触に吐き気をもよおす。

――ドクン

生き物から物へと成り下がった物を見つめる目は、冷淡な物だつただろう。

――ドクン

実際は叫び出したい気分であつたが、それを抑える為の行動だつたかもしれない。何を考えたのか、俺は其れを喰らおうとした。

ーードクン

隣で白仙が止める声が聞こえるが、何かの意思によって手を骸へと近づける。

止めて欲しい

妖怪としての本能：

だとしたら止めて欲しい

錯乱故の行動：

だとしても止めて欲しい

兎に角止めて欲しかった。こんな物を喰らうなんて嫌だ。自分は妖怪であるが、それ以前に元は人間だったのだ。抗う意思の無い手はゆっくりと死体へと近づいていく。

ーー止めて欲しい

それは意外な方法で叶えられた。

宙を飛んだ、否、舞ったというのが正しい。何者かの力によって宙を舞う俺と白仙。気が付けば、二人して小屋の前に立っていた。

???????

「それで…腹が減って外に出たと？」
「（はい）」

暫しの沈黙

「白仙！夜は危険だと何度言えばわかる！それも客人を巻き込んで
！」
「（ごめんなさい…）」

おかしいな。鍾離権。この人普通に喋るじゃん。
俺と白仙は怒り心頭の鍾離権に怒られている。それも小屋の外で。
何でも仙の付く生き物の肉は、人外から見れば副作用無しのドーピ
ング剤の様な物で、仙人に成り立ての力の弱い者や、仙獣はよく狙
われるという。それは人外の力の増す夜が一番危ない。だから故に
鍾離権はここまで怒っているのだ。しかしこの怒鳴り声でも起きな
い呂洞賓は…

「よいか！今度こんな事があつたら、唯じゃすまさん！白仙！わか
つたな！」
「（はい…）」

白仙が余りにも可哀想なので

「まあまあ、そこまで「黙っとれ！」
「はい。」

怖いよこの仙人。一応客人ですよ俺。あなたもそう言ってましたよね？

「いいか白仙。お前が死んだら呂の心は本当に消えてしまつぞ。そんな事儂は見ておれん」

「（もう…二度といたしませんお師匠様）」

「うむ…もう行きなさい」

話が終り、白仙は小屋の中に入って行く。俺もついて行きたかったが、俺にだけ何も言わない鍾離権ではない。

「栄崔といつたな？」

「はい…」

「先は辛かつたろう？」

「いやまあ、他人が叱られているのを見るのは」

おかしい事は言っていないはずだが、鍾離権は静かに微笑む。

「それではない。先に、骸を喰らいたくなつたらう？」

「それは…あれ？妖怪だつてばれてます？」

「儂らを誰だと思つておる？呂以外皆気づいておる」

やはりばれていたようだ。しかしそれでも何もして来ない辺り、平気なのだろうか。

「お主は妖怪の癖して、心はまるで人間じゃのう。だから先の衝動を堪えたのだらう？まあ、儂が止めなければ危なかつたかな」

言葉を無くす。この仙人は俺の全てを見通しているらしい。

「生きるとは難しいのじゃよ。人間…ではなく、生きる物全てにとつてな」

「そうです…ね」

「何ならどうじゃ？仙人に、いや、仙河童でもなつてみるかの？」

戯けた顔の鍾離権。この人もこんな顔をするとは。

「いえ。俺は河童です。それにまだまだやらなければならぬ事も沢山ありますし」

「人探しか？」

「そうです。何故わかりました？」

「勘じゃよ。仙人のな」

「さいですか…」

この老人と喋っていると不思議に気持ちが安らぐ。

「紅糸鈴という人なのですが…」

「なんじゃ。探しているというのは姉か」

そうですか。お姉さんでしたか…て、あれ？

「紅糸鈴ってあなたの姉さん！」

「そうじゃ。300年程会ってないがのう。姉に会いたいのなら、

気にせんで良い。姉は会いたいという人の所に突然現れるからなのう」

「あれ？でも苗字が…」

「ああ、それはのう。儂が仙人になった時につけたのじゃ。鍾離権
という名をな」

「さいですか。貴重な情報を有難うございます」

「はっはっは。良いんじゃないじゃ。ほれ、早う寝るんだ。明日
は早く起こすからのう」

「は、はい。本当に有難うございます。では」

こつして俺は月を眺める鍾離権

を置いて床に着いた。次の日朝にはこの山からおそらばしている事を疑わず。

伝説河童、正座する

目を開ければ晴天。見渡す限りの青空である。やはり山の上での目覚めは気持ちが良い。少し寒いかな。

暫しの間自分が何故ここにいるのか考える。そして仙人云々の事を思い出し、一人納得する。寝起きの人間—河童—にはよくある事だ。

隣では呂洞賓がそれはだらけた顔で眠っている。この顔をして昔に自ら命を捨てようとした事があるなんて信じられない。いや、全く。

いや、可笑しい。俺は目を醒ましたが、外には出ていない。何故屋根も壁もない？何故空が見える？そして理解。

「おい、呂兄貴、起きろ…家、なくなってるぞ」

「んん…何だ朝か…。清々しい空だな」

「…」

暫しの間

「おい…屋根がないぞ…」

全く鈍い奴である。普通第一声は、屋根が無い！だろうが。まあ、自分も初めは気が付かなかった訳だが。呂洞賓には分かるまい。

「何があつたんでしょね。隕石でも落ちましたか？」

いやまあ、隕石が落ちたら俺たち死んでるがな。適当な冗談だ。

「隕石って何だ？」

「隕石を知らないと？宇宙から降って来る石ですよ」

「ん？」

「だーからー、空からですよ！」

「へ、へえ〜なんか凄いな」

未だに「隕石」などと言う概念が無いのだから、呂洞賓が其れを知らないのは当たり前。という事に気が付いたのは大分後である。

「まったく…こういう時はどうすれば良いんだ？」

「あなた僕の兄貴でしょうが？自分の家なんだし自分で…」

次の言葉はある光景を見たために紡ぎ出される事は無かった。今いる山の天辺にあるこの小屋。正確には存在一過去形一していた小屋だが、周りを見渡せば、その人自身の視力の加減では二合目辺りま

で見渡せる。

俺が見たのは其れはまさしく隕石が落ちた様な陥没した地面。木々は薙ぎ倒され、地面は抉られている。其れは丁度、小屋から始まり、今俺の目を掴んで離さない場所へと続いている。人影が見えるが流石に誰かは確認できない。

「呂兄貴。あれ」

「うん？」

暫くの間、悲劇の主人公役を脳内で演じていた呂洞賓が、こちらを振り向く。視線は自然と俺の見ていた場所へ。

「死神：今日だったのか。走れ！栄崔！」

叫んだ呂洞賓は人外の速さで走り出す。人外の筈である俺だが、それでもぐんぐんと離される。仙人、恐るべし。

??????

着けば戦場である。草むらから覗き込めば

三人の男女

――鍾離権

何となくだがそんな気がしたのだ。

――赤髪の長身の女性

その体からは何か揺らめいており、まるで大地がその女性のに応える様に波打っている。恐らく人外だろう。何故か鍾離権を睨んでいる。

――赤髪の少女

こちらの方が少し髪の色が明るい。身の丈程の鎌を持っており、同じく鍾離権を睨んでいる。

「何だこれ？修羅場？」

呑気な事を言ってみるが呂洞賓の険しい表情は変わらない。しかしその目はどこかキラキラしているのだった。

初めに鎌を持った少女が動く。脚力では出せない滑らかな速度で鍾離権に近づく。加速すら無かったその移動に、俺と呂洞賓は息を飲んだ。少女の手に持つ鎌は一瞬にして鍾離権の首に襲いかかる。飛びだそうとした俺だが、其れを何故か呂洞賓が止めた。

ひゅん

確かに首を切り落とした。そんな顔をしていた少女の顔は、情けない素振りの音と共に、驚きに変わる。そこには鍾離権はいなかったのだ。正確には鍾離権は仙術を使い霧になっていた。そのまま少女の、振り切つてしまい動きの無い鎌を蹴り上げた。勿論、瞬時に霧から元の姿に戻つてからだ。くるくると回りながら飛んで行く鎌を呆然と見つめる少女。

「流石お師匠様！」

呂洞賓が囁す。

「うわああーん！私の鎌がああー！」

先の威勢は何処へやら。見事な女走りで、鎌の落ちたであろう林の中へと走って行ってしまった。ホッとした顔の鍾離権であったが、すぐにそれは変わる。

「岩碎掌！」

その掛け声と共に、先まで鍾離権と少女の戦いを傍観していた女性が動いていた。咄嗟の事に避ける鍾離権。

バアアオオオン

奇妙な音と共に地面が碎ける、否、弾けた。内側から弾け飛んだのである。あれ、喰らったら死ぬ。うん。間違いなく。

攻撃を緩めない女性。避けた鍾離権に追い討ちをかける。

「龍昇脚！」

音速の速度で放たれた蹴りは、鍾離権に仙術を使わせる暇もなく、顎へと打ち当たる。

上空へと打ち上げられた鍾離権を、女性は追いかけて

「波鉄槌！」

清々しい美声と共に叩き落とした。

よくアニメで人が高い所から落ち、地面に埋まるシーンがある。まさしく鍾離権は其れだった。走る時のポーズで地面に窪みを作っていた。仙人もへったくれも無い。

そして女性の目は、草むらから覗いていた俺と呂洞賓に向けられた。

??????

「何処に行ったの私のかまああ」

林の中の静寂を掻き乱す様に、一人の少女が歩き回っていた。この少女、死神である。毎度の事、輪廻を外れた人間を輪廻に戻す為に現世にやって来る。しかし今までその仕事をやり遂げた事はない。単純に弱いのだ。

「あ、あつた！」

鎌は背の高い木の胴に突き刺さっており、手が届かない。仕方なく木に登る少女。スカート姿の少女が木に登ればどうなるかわかるだろうか？丸見えである。

「こら小町！下着が見えてますよ！はした無い！」

きゃん！と言う可愛い掛け声と共に、小町という少女は今しがた手に取った鎌と共に、地面へと落ちてしまった。落ちた先には札を持った女性が、苦笑を湛え、立っていた。

「映姫様あ、驚きましたよお」

「まったく…。今日も失敗ですか？」

「だって…だって…あいつ、強くて…」

涙目になる少女。

「それに映姫様だつてパンツ見えてますよ。くま柄ですか」
「なにを！」

バツ！と自分のスカートの前を抑える。少女が落ちて来て、足を木に向けて倒れていた。其れを上から覗き込めば、あらやだ股の間が少女には丸見えだったのだ。

「いいですか！この事は秘密ですよ！他の人に言つたら！」
「わかつてますよ映姫様。只、映姫様もおっちょこちょいな所があつて安心しました」

にやける少女。その笑みは、心の底から映姫という女性を思つての笑みであつた。

「少し怪我をしていますね。早く帰つて手当しましょうか」
「はい、映姫様」
「もう、泣いてはいけません。あなたは死神なのですよ」
「泣いてませんよ！」
「ほら、泣き止んだのなら、少し休暇を上げますから」
「やったー！早く帰りましょう！」

「この子は…」

何処か親子の様な二人。突然現れた扉に、二人して消えて行く。こ
うして林の中は静寂を取り戻した。

???????

栄崔と仙人二人。正座である。

何故か三人して赤髪の女性に説教されている。

纏めれば

女性は久しぶりに鍾離権の家を訪れた。そこで鍾離権が少女を押し
倒しているのを発見。全力で成敗する事にした、らしい。

しかし鍾離権曰く

あの少女は自分の命を狩りに来た死神で、取っ組み合いの最中が、
押し倒しに見えただけである、らしい。

「いいか晴鐘？例え死神だとしても押し倒しなど、だからやって無
いと言ってるのではないですか姉上！」

「ぬ、姉に口答えか！勝手に改名したのも共に御仕置きが必要だな

「!」
「もう唯の小童では無いのですぞ!」

鍾離権が少し格好良い事を言った気もするが、殴られる蹴られるの暴行である。鍾離権にとって唯一の助けは、仙人故の頑丈な体だろう。南無南無。

「（呂兄貴。あの人が鍾離権さんの姉?）」
「（そうだ。紅系鈴だ。怖いぞ）」

とぼつちりを受けた俺達は、御仕置きの終わる小一時間の間、ずっと正座であった。足が痺れたのは言うまでもない。

???????

「それで、私に教えて欲しい事があると?」
「はい。能力の事なら紅系鈴に聞け、と何人もの人に言われましたので」

「偶然にしてはお前に其れを言った者達は…人外の類だろうか?」
「ええ、まあ…」

「永く生きていないと中国にいる私の事まで知ってる筈がない」

小屋のあつた筈の場所。俺と紅糸鈴は向き合い、話合っている。二人の仙人は滝打たれにでも行つたらしい。

「それで、能力の名は？」

「瑞を操る程度の能力」です。どうしても瑞の意味が理解出来ません」

「ほう…」

考え込む紅糸鈴。

何か不可解な点でもあつただろうか？

「瑞とはな…中国では、縁起の良い、という意味だ」

「え？それじゃあ僕の場合は…」

「いや、其れを操る物では無い。恐らくは瑞獣を、又はその力を操る力だろう。永く生きて来た経験上だがな」

――瑞獣

応龍、鳳凰、麒麟、靈龜の四大瑞獣を頂点とする靈獣達である。人にとつての瑞兆、即ち良い事を齎したり、良い事があると現れる靈獣達である。各々が強大な力を持ち、人外を遙かに超す存在だ。古来よりその恩恵を受ける為に、ある者は讃え、ある者は脅し、ある

者は伸して来た。兎に角、凄いのだ。

「其れを操ると？」

「うむ…だがお主何者だ？一介の河童であるに」

「僕にもわかりません…」

別に不愉快でも無いのに沈黙が流れる。

「その、紅糸鈴さんの能力は…」

「ああ？私か？「龍脈を操る程度の能力」だ。その、あれだよ」

「なんですか？」

「そうそう。地面には、龍脈と呼ばれる気の流れが無数に流れていてな。その上に立っていれば家内安全、万年豊作、子孫繁栄なんでもござれなのだよ。私は其れを戦いに少しばかり応用しているんだ」

だとしたら先の驚異的な攻撃も領ける。地面が弾けたのも、その下にある龍脈から気を集めて爆発させた為に、そうだったのであろう。もし喰らったら…

「いやしかしお前の能力は私のよりも数段格が上だ。私の能力は唯、龍の力が溢れ出している龍脈の力を借りているに過ぎない。しかしお前は竜そのものの力を操れる。天晴れだな」

「さいですか…」

こう言われれば使ってみたくなる物だ。早速表に出て試す事にした。

??

辺り一面焼け野原…蟻から見たらな。

鳳凰を思い浮かべながら紅い火の玉を創り出す。出来た物は蟻から見れば太陽の様な大きさだった。投げつけても少し地面が燻っただけで、到底戦闘には使えない。いや、遭難した時にいいかもな。

「まあ、落ち込むで無い。初めはみんなそんなもんだ」

「はい…」

紅糸鈴が慰めてくれるが、長年の夢だった自分の能力がこの様なちっぽけさでは泣く。

「元々瑞獣はある条件の元現れるのだ。鳳凰なら徳のある王が生まれた時、麒麟なら仁の心を持つ王が生まれた時。その他にも？豕というのもあってな。優れた裁きの心を持った者が現れた時に現れる。自分がそう成らなければ、力もうまく使えないであろう」

「そんな事言われましても…」

「いや、待て。お主河童じゃろう？治水か…」

突然紅糸鈴が一人でブツブツと呟き始める。

でも、突然小さいが火の玉を創り出せる様になったのだ。確実に能力が使えたという証拠ではないか。

「そつだ！霊亀だ！」

「はい？」

「霊亀はな。治水の才を持つ王が生まれた時に現れるのだ！お前は河童故に水とは縁が深い筈だ！」

そう言われて見ればそうかもしれない。河童は別名水神とも呼ばれる程、水と縁が深い。

これならもしかするともしかする。

「水」

こう心の中で唱えた瞬間に、全てが変わった。虫の蠢く感触、花が風に揺られる感触、紅糸鈴が草を踏み締めているその全てが自分の頭の中に流れ込んで来る。この世全てに存在す水。H₂Oである。其れに関わる全てが俺には理解が出来た。自らの身体を血液の流れさえも。

「どつだ？」

「凄い…です」
「そうかそうか」

俺の一言で全てを理解したらしい紅糸鈴。

これは波乱万丈の人生、河童生に磨きがかかると思っ た事は余談である。

そして河童村の秘書庫で見つけたあの本の作者「紅糸鈴」。これは運命なのかと思っ た事も余談である。

伝説河童、湯に浸かる(前書き)

ピンク色なんてないんで
テスト終わった

伝説河童、湯に浸かる

真逢ノ栄崔仙境後にし数十年、やる事もなく旅をする、あつさりお茶漬け食べたくて、日本に帰郷船酔いと、ところで出会った女兒を連れ、名もない道を今日も歩む。

「なんか食べよう、ね？」

「…」

無言

「いや、ほら、体が持たないから。お腹すいてるでしょ？」

「…」

無言

「いいの？お兄ちゃんおにぎり全部食べちゃおうよ？」

「…」

全く持つて顔から火が出るような言葉遣いである。誰かに見られたら発狂する。

俺と共に昼の街道に行くのは一人の少女。まだ体の出るところも出ていなく、日が暮れば瞼が閉じてしまふ。そんな少女。しかしだが…親がない。世に言う孤児である。なんともまあ皮肉な事だが、彼女の両親は妖怪の類に喰われてしまい、彼女自身も同じ目にあうところであつた。それを助けたのが俺、栄崔である。妖怪である俺がだ。

云百年と生きてきた俺は、普段、傍観者になるよう努めている。世の可笑しい事を知るにはその輪の内からではなく、輪の外から傍観していた方が良いのだ…多分。まあ、入れ知恵なのだが。

話を戻す。

親の件からのショックなのか、一向に口をきかない。というか俺と話そうとしない。俺が近くにいると飯も食おうとしない。名前も教えてくれない。これは俺だってショックである。俺が妖怪だからいけないのかと考えてみても、少女に俺の正体がわかる筈もなく、結論男が苦手という事で結末をつけた。俺が嫌いなわけじゃないんだ。しかしだ。ある人の言う事だけは聞く。

「お嬢ちゃん、食べなきゃ大きくなれないぞ？」

「うん…わかった…」

俯きながらも返事をする少女。本当は腹が減っていたと俺は推測。

「お、偉いなお嬢ちゃん！」

「……食べたら……」

「ん？」

「……お姉ちゃんみたいに……」

「みたいにな？」

「……胸が……大きくなる？」

「……多分……大きくなる……と、思うよ……あたいは……うん」

さて、男栄崔がいるのを無視して絶賛ガールズトーク中の二人。話題に出てた少女ではない方の名を 小野塚小町 という。職業死神。この時代からずっと先の時代の少年達が憧れる肩書きだ。この小町、例の仙境にも、俺が世話になった仙人 鍾離権 の命を奪いに来ていた。

そして何故ここにいるかなど。

「映姫様のメーラー」

との一点張り。

旅の色が増えるのはいいのだが、小町の持っている鎌が怖い。全く持って怖い。しかしまあ、少女が何も言う事を聞いてくれず、途方にくれていた俺の元へ現れ、少女と意思の疎通を成してくれた時は、女神様かと思いました。死神だけ。はい。

「よし…迷った」

「これだからお前さんは木偶の坊と言われるんだよ」

腕組みをして此方を軽く睨む小町。胸が…。

「な、何を！俺はそんな事誰からも言われてないぞ！」

「いや、あたいが言ってる」

「あ…そう」

「そんな事よりもどうするんだ？道、迷ったんだろ？」

否定はできないので。

「迷った…よ。確かに」

自分で話題を振ってきたくせに、自分で終わらせやがったこいつ。しかしさつきから隠していたが、実は道に迷っている。町から町への移動中だった俺達は、只今迷子なのである。

「そりゃあ地図を逆さまに見てる男に道案内を任せたあたい達が阿呆だったね。お嬢ちゃんもそう思うだろう？」

「（コク）」

やはり小町には懐いてる少女。

「おい…」

そしてなかなか漫才というのを解っている少女である。

しかし今道に迷うのはきつい。昼でも季節は冬。太陽の光さえも俺達の体温を奪っていく、そんな錯覚に陥る。特に少女は既に震えが止まらない状況だ。早く何処かの宿屋に入って暖を取らなければならぬ。科学のないこの時代、昨日の自然が今日の敵、である。

しかし俺と小町はかたや河童かたや死神であるから大丈夫といったら大丈夫なのだが。いや寒いけど。

「ここで歩を止めていても埒が明かないな。疲れるけどあれを使うか」

「お、あれかいな」

あれ、というので伝わるぐらい今からやるの事はなかなか珍しく事である。

「後で何か奢れよな小町」

「生憎だけどあたいは銭なんざ持ってないよ。映姫様にはお前さんの財布から借りると言われたからね」

「んな殺生な…」

他愛のある話をしながらも、俺はあれ、「水眼」の準備を始める。

――水眼

「瑞を操る程度の能力」によって霊亀の力を引き出し、それによって使う事のできる、水を操る力を応用したもの。地中、大気中にあるゆる形で存在する水を、感じる事によって、場を把握する事ができる。これを使って大量に生き物が蠢いている所を探せば、そこが町なのである。能力修行の賜物だ。

「どうだ？」

「そうだなあ…案外近い所にあるぞ。歩いて小一時間だ」

「流石大将！よかったなお嬢ちゃん！」

「うん…」

調子の良い小町と、少女である。

??????

町の入り口に来てみれば、案外大きな町であった。海に面しており、これは宿屋の食事が楽しみである。

「ふえ〜人が沢山だね〜」

「あれ？小町はこつこついう所初めて？」

目を見開いている小町に問う。

「ああ、いつも三途の向こうで死人ばかり見ているからな。仙人だつてだいたい仙境にいるから、こつこつというのは初めてみるよ」
「ふん」

俺達三人は宿屋を探して数分歩くが、直ぐに見つかる。元々疲れた旅人の為に、町の入り口付近に宿屋を作るのが普通であるからだ。

宿屋の看板には。

――夫婦割引

の文字。

財布を確認する俺。

まさかという目をする小町。

無反応の少女。

頼む俺。

渋々頷く小町。

無反応の少女。

??

「お客様は夫婦で？」

「あ、はい」

「そちらはお子さんで？」

「ええ……」

「わかりました。割引させてもらいます。部屋は三人で一つです。夕食はこちらが運ぶので、それまでごゆっくり」

「あ、有難うございます」

「では、こちらを風呂場へ持って行けば無料で入れますので」

「あ、どうも」

無事に難関をくぐり抜けた俺と小町は、言われた部屋へと行くが、何方も顔が赤い。何方も初心なのだ。と、あとあと解析したのは余談である。

部屋は以外と狭く、寝る時には川の字になって寝るしかないようだ。しかし温かいのは有難い。

三人共に持ち物を広げたりくつろいだりしていたが、先の夫婦発言のせいで生まれた沈黙が漂う。みな顔は赤い。いや別に夫婦でもないし、どちらかと言えば生き物の寿命を知らせに来る死神は、生あるものにとつては、敵である。只、財布の為を思ってた事がここまで恥ずかしさを産むとは考えもしなかった。

「お嬢ちゃん。風呂に行こうか」

「…うん」

色々手に持って宣言する小町。それに相槌を打つ少女。

「え、飯食べる前にか？」

「そ、そうだよ！わ、悪いのかい！」

「いや、別に…」

「覗くんじゃないよ！」

「だ、誰がそんな事！」

俺が目を空して、気付けばもう二人はいない。恐らく小町が能力でも使ったのであろう。小町の能力は「距離を操る程度の能力」である。場所と場所の距離を縮めれば、何所でも一瞬で到着だ。

「しっかし俺…………童貞何年目だろう…」

前世と今を足したらもう…泣きたい。いや、別に。うん。

「…さて、俺も風呂に行くでしょう」

俺は哀愁を漂わせながら風呂へと歩を進めた。

???

「たく…あんな変態初めてみたよ」

大きな風呂場…否、銭湯で呟く小町。宿屋と銭湯が共同経営らしく、
渡り廊下で直ぐに銭湯である。

それにしても小町の頭の中では、栄崔＝変態、という風に記憶が美化されつつあった。実際は栄崔は何もしていないのだが。

「気持ちいいかいお嬢ちゃん？」
「…うん」

背中を小町に流されながら、自分の青みのかかった髪を梳く少女。
両親を無くそうが、地球が滅びようが、女は女。自分の髪は宝物で
ある。

「綺麗な髪だねえ…伸ばすのかい？」

「…うん」

「そうかい。あたいはいつも切っちゃうけどねえ」

少女の髪は耳の下ぐらいまで伸びている。艶のある綺麗な髪。女の
憧れである。しかし小町だって負けてはいない。引き締まった腰、
豊満な双丘。彼女のプロポーションは、将来の日本で言う グラビ
アアイドル 以上なのだ。

「お嬢ちゃん…名前はなんて言うんだい？」

「…」

「まあ、いいさ。いつかは教えてくれよな」

「…うん」

はたから見れば親子のような二人であった。

???

「ふう…気持ちいい…」

一人男湯で呟く。

「にしても男は俺一人か…」

普通銭湯には人がわいわいとしているのが普通なのだが。そういえば、町で男を見なかった。只の偶然なのか。

「ま、どうでもいいけど」

どうでもよくはないのだが、只、呟いてみる。

「どつでも良くはないわよ」
「誰だ!！」

何所からか女の声が聞こえるが、湯けむりのせいで視界が悪い。普通なら男湯に女というイレギュラーな状況に目を向けるのが人だが、生憎俺は長年生きた妖怪。気配も無く突然現れた声に危機を覚える。

大丈夫、という声とともに俺は腰を掴まれ、お湯へ引きずりこまれた。まさか下からとは。

???

「(離せ!)」

口からはゴポゴポと泡しか出ない。腰を掴む手は華奢だが、その力は異常に強い。後ろを向けば正体がわかるのだが、「女」という単語が頭の中で反芻し、どうしても首が回らない。俺の抵抗は、背中

に二つの膨らみが当たる事で完全に停止した。

「（良い？聞いて。私は傍観者だけど一つ教えてあげる。赤いものは食べない事ね）」

水の中だというのに綺麗な声。

「（なんだ…それ）」

俺の声は泡にしかならないのだが、ちゃんと相手は理解したようだ。

「（目から水を流す事になりたくないのなら、忠告に従いなさい。これは私の罪滅ぼしでもあるの）」

「（っ、罪滅ぼし？）」

「（人の言った事を鸚鵡返しに聞くのは良くない事よ）」

人をおちよくるような声で話す女。口喧嘩が強そうである。

「（その、当たってるんだが。胸が…）」
「（あら、当たてるのよ）」

そう言うと、突然背中に触れていた二つの感触が消えた。否、消えてしまった。ちくしょう。

「ぶつつつつはあああ！」

お湯から顔を出し新鮮な空気を一気に吸い込む。冷たい水の中なら息ができる俺でも、温かい水の中では無理なのだ。さっと後ろを振り向いて、水の中を見ても何もいない。

「なんだっ たんだ今の…」

俺の声は湯けむりへと消えて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4951x/>

伝説河童の数奇な人生

2011年12月24日12時47分発行